

発足15周年記念

わがまち

あわた

昭和60年1月

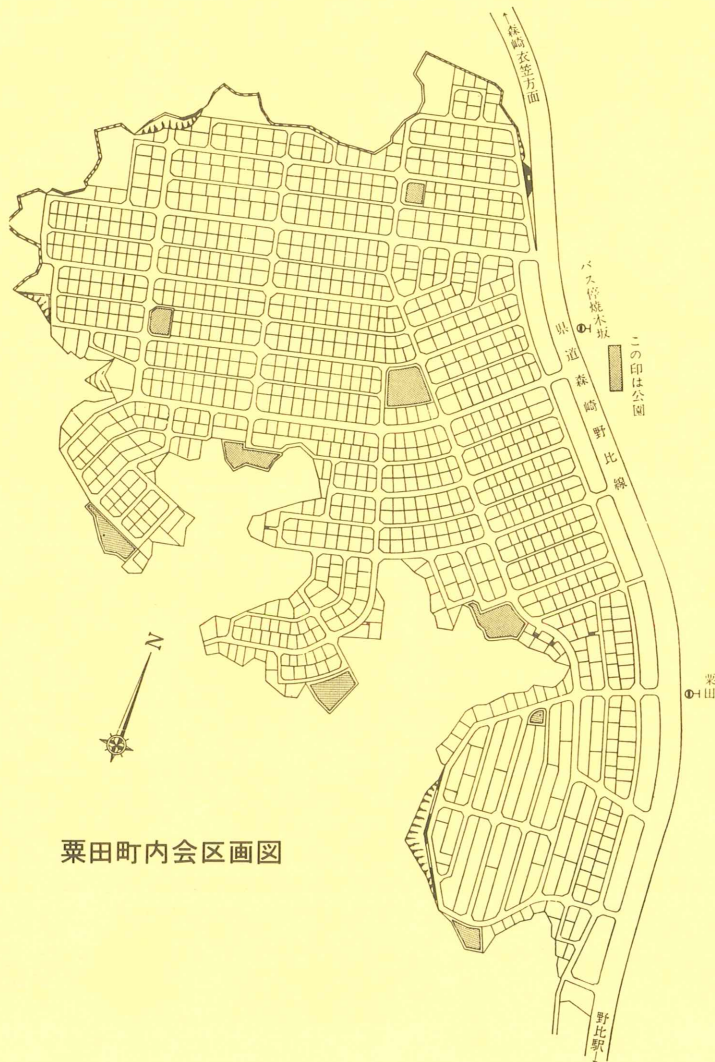
栗田町内会

町内会発足15周年記念

わがまちあわた

昭和60年1月

栗田町内会



栗田町内会区画図

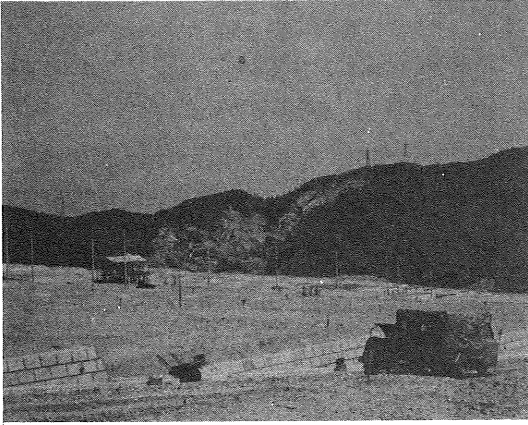
## < 目 次 >

あ い さ つ .....	町内会長 成田金治郎 .....	4
15年のあゆみ .....		5
町内会の組織と各部別年間事業並びに防災組織 .....		15
町内会の資産状況 .....		19
世帯数・人口・地区割の推移 .....		20
会館利用状況と同好会の活動 .....		21
住居表示の変更 .....		22
町 内 会 旗 .....		22
町内会年度別役員表 .....		23
町 内 会 館 .....		25
粟 田 音 頭 .....		28
駐 在 所 .....		30
公 園 .....		30
区 割 図 .....		31
粟田道今昔及び粟田周辺の史蹟 .....		33
その他の社会活動 .....		38
随 想 な ど .....		40
あ と が き .....		51

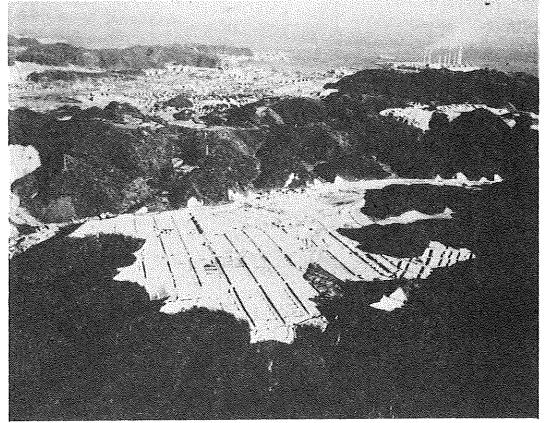
(表紙題字……成田金治郎)



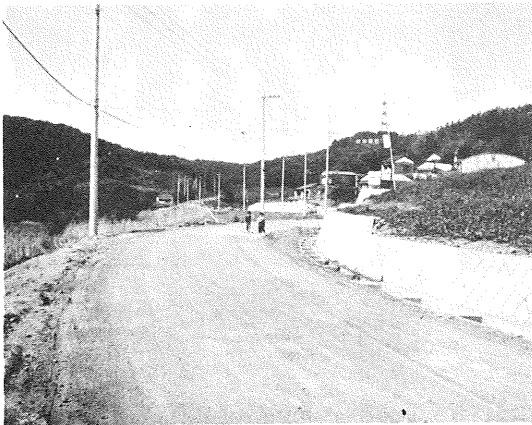
＜15年の歩みの中から＞



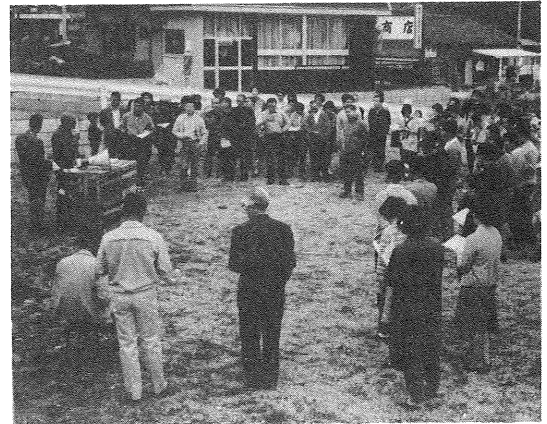
(造成中 昭和44年5月)



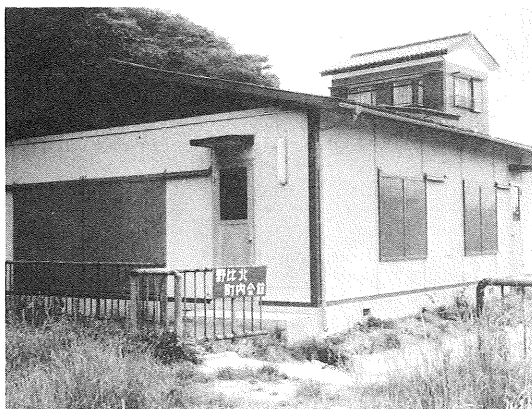
(昭和45年頃)



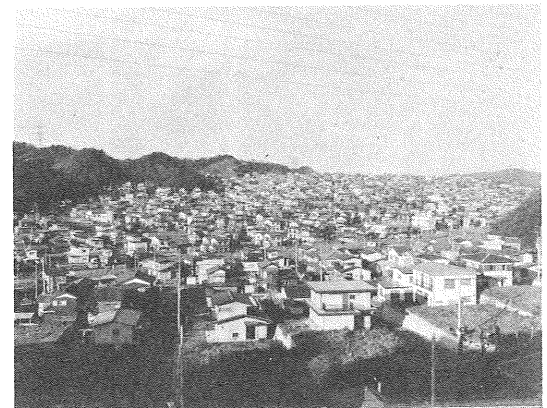
(粟田への道(野比～島田)昭和44年4月)



(青空総会 昭和46年4月)



(旧町内会館 昭和47年)



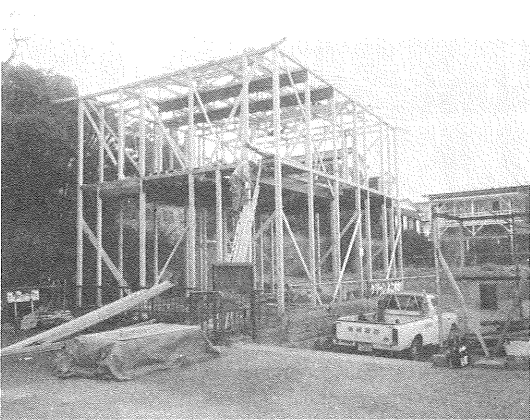
(粟田の町 昭和48年頃)



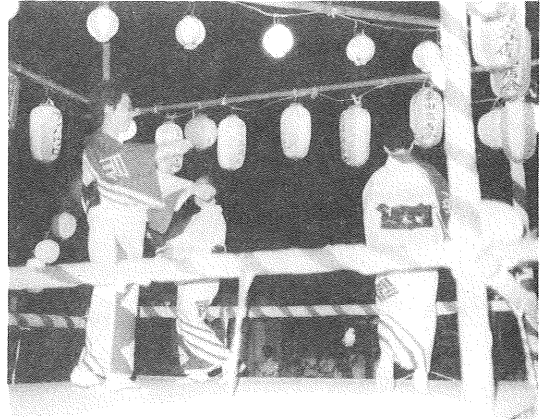
(栗田町内会旗 (正))



(副) 昭和50年8月)



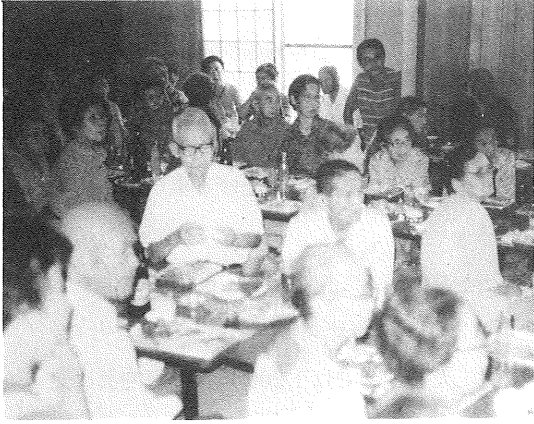
(現町内会館の建設 昭和55年2月)



(納涼大会 昭和59年8月)



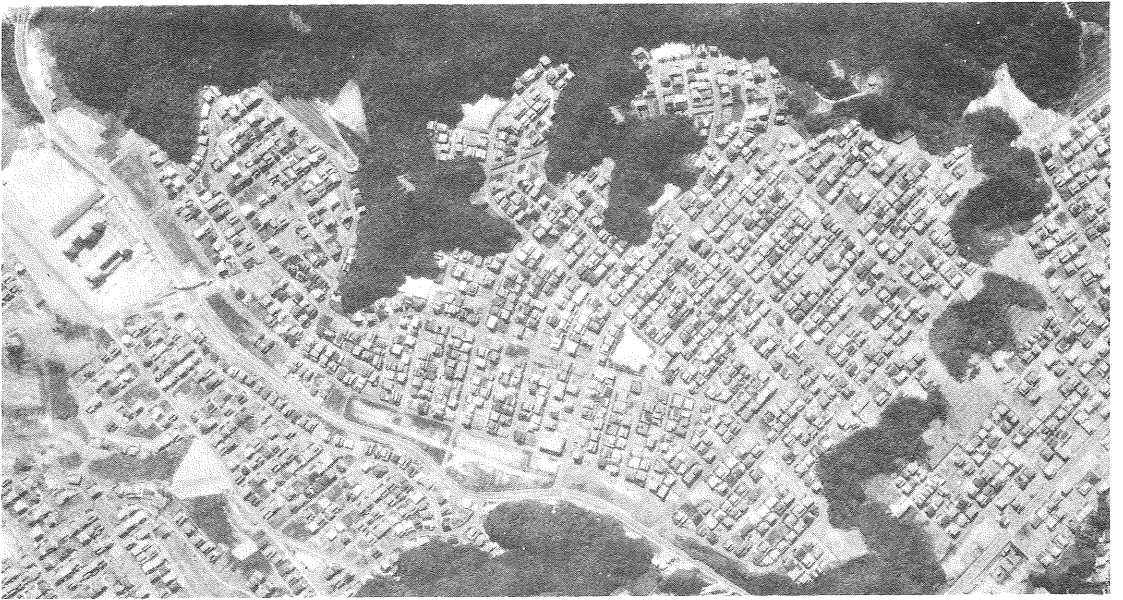
(神輿・山車の巡行 昭和59年8月)



(敬老の日 昭和59年9月15日)



(現 町内会館)



(わがまち あわた)

## 御 挨拶

粟田町内会長 成 田 金 治 郎

粟田町内会創立15周年の誠に意義ある年に、記念誌の巻頭から御挨拶申し上げる事が出来ますことは、大変な感激であり光栄に存じます。

15年前の当町内会の過去をかえりみますと、有志の方々のご相談しご協力を得、60世帯により昭和45年1月当団地(町内会)の造成会社の作業員宿舎の2階を借り野比北町内会が誕生しました。(50年3月1日住居表示の実施に伴い粟田町内会と改めました。)今では1,200以上の町内会に発展してまいりました。町内会発足当時は何から何まで不足な事(物)ばかりで、思い出すついで昨日のように思われ感無量であります。

町内会は発足以来犯罪・火災のないクリーンな明るい住みよい地域社会環境づくりを目標に、歴代の役員理事・町民各位のご支援ご協力を得まして努力してまいりました。15年を経過した今では創立当時共に苦労をした役員で既に他界された方もおり、思いもあらたに過去の色々な事が浮んでまいります。

昭和54年には1,150世帯の町内会に発展し、会館の利用も増大し、古い会館ではせまくなり利用に応じられない状態となり、将来も考え町内皆様のご理解とご協力により、昭和55年、今の町内会館を新改築いたしました。改築にあたっては種々難問題が起り、当時の役員理事には大変ご苦労をお掛けしました。

町民は各地より転入された人々です。僅かですが転出転入される方もあります。皆様ご承知の通り社会は次第に徹底した経済社会に移行のように感じられます。町民の皆様には永住の方々が多いと思います。今後、隣近所お互いにより人間関係をつくり、明るく住みよい環境づくり、地域社会(町会)づくりを祈念いたします。

この度15周年記念誌の発行出来ますことは誠に感慨の至りです。これも歴代の役員の方々を中心とした町民各位のご支援ご協力の賜と深く感謝いたします。尚各方面の方々より賜りました御指導ご支援を厚く御礼申上げご挨拶といたします。

## 15 年 の 歩 み

### 【昭和44年末～45年始】

当時まだ5,60世帯、県道は舗装のための工事中、一方では電話ケーブル埋設の工事とあって、雨天のときや雨後は水たまりと泥濘で、通勤通学は勿論のこと、日々の買い物も苦労の連続であった。バスは岩戸までしか運行されて居らず、而も1時間に1本位。第3第4工区は宅造中で、県道沿いの空地には造成機材や資材が山積し、更に飯場や事務所などの仮設家屋も立ち並んでいた。ハイランド県道側も、山を削り池を埋めての造成に昼夜をわかたぬブルドーザーの騒音であった。

明けて昭和45年1月10日、第百土地現地案内所に各世帯より1名宛参集、土地会社の営業部長より、現地及び将来の見通しについての説明と、タクシーの運行に伴う電車の乗車時刻並に帰駅時刻の調査があった。これによって通勤通学者（但し早朝に限る）のための足の確保が、少しばかりできるようになった。

翌1月11日、団地住民集会で町内会設立の急務について話し合い、設立準備委員会設置と6委員の決定をした。

1月18日(日)午後1時～3時、町内会設立総会、全60世帯、出席者41名、委任状16名。

当日は冬のさ中、野外では寒さが厳しく、風も強い。止むを得ず県道沿いに建っている国土開発KKの飯場の二階を借りて会場とする。造成機材の散乱する足場の悪い場所であったが、定刻には三々五々参集、狭い二階の一室、きしむ床板の上には古びた机とこわれかけた椅子が二、三脚、破れたガラス窓、散乱した資材や紙片、裸電球がわびしく揺れる火の気のない廃屋のような部屋の中、寒気がひしひしと脚もとから這い上る。しかし、集った人々の顔には、町内会設立への関心と熱意がみなぎって、すき間風の寒さを感じさせない。

議事の進行につれて、会則・活動内容・役員理事等の決定を見た。当面する諸問題として、(ア)バスの運行促進、(イ)街路灯の増設、(ウ)ゴミ・くみ取り対策、(エ)交番・ポスト・電話の早期誘致、(オ)郵便物の遅配対策、(カ)団地案内板の設置などを掲げて総会が終了した。そして、ここに野北町内会が誕生したのである。

### 【昭和45年度】

町内会発足後1年、その事業の成果は、(1)通勤者のためのタクシーのチャーター(昭45・3～46・1の11か月間)、(2)子供会の発足(昭45・4・5)、(3)ゴミ集収週2回に、(4)青年部の発足(昭45・6・14)、(5)電話架設開始(昭45・6)、(6)防犯責任者制の設定(昭45・7)、(7)納涼大会開催(昭45・8・14～16)、(8)外灯の増設(昭45・12・16)、(9)郵便物遅配の解消、(10)町内案内



板・車の速度制限標識・ごみ集積所標示板等の作製設置，(11)会館用地確保のための奔走，(12)県道照明灯の新設（昭45・12），(13)会員名簿作成，(14)防犯防火・交通安全運動の講習会（春秋），(15)老人クラブ（緑会）発足（昭46・2），(16)野犬捕獲（保健所）実施（昭45・10と昭46・3），(17)町内美化運動の制定（毎月第2日曜日），(18)婦人部の発足（昭46・3・24），(19)ペルー地震・年末助け合い募金，(20)バスが岩戸から延長，野比駅まで運行開始（昭46・2・1）などであった。

#### 【昭和46年度】

事業の主なものを挙げると，(1)町内会館の建設計画，(2)街灯の増設，(3)納涼大会，(4)自衛消防団の結成，(5)ごみ集積所の増設，(6)横断歩道の新設，(7)町内に交通標識の新設，(8)小学校建設の促進等，その中で特筆すべきは町内会館の建設である。

町内会発足当初からの懸案であった町内会館の建設について，その実現までには幾多の難問や支障に逢いながらも，検討を重ね，交渉を重ね，役員理事の献身的な努力と町内会の皆さんの協力と支援とにより，漸く実現することになった。

- ア. 名 称 野比北町内会館
- イ. 土 地 野比1210の52（市借地－現在地）  
40.66坪（134.178㎡）
- ウ. 建 物 軽量鉄骨プレハブ平家（大和ハウス施工）  
22.9坪（75.53㎡）
- エ. 建築総額 2,635,465円
- オ. 資 金 通常経費，基金，特別予備金，及び借入金，補助金並に寄付金

町内会の事業とは別に47年1月には，プロパンガスの集中方式から，全家庭，都市ガスへの切替え工事が行なわれた。

#### 【昭和47年度】

4月20日，ようやく町内会館が竣工した。あらゆる町内会の活動が，会館を母体に行なわれるようになった。先ず，新年度の定期総会が，真新しい会館で行なわれ，屋外にまで人があふれる盛況であった。内部整備も，日を追って充実し，子供会，婦人部，老人クラブ（緑会）等の活動は勿論のこと，講演会，講習会，展示会等も活発に行なわれた。2月に県道の信号機が設置された。

#### 【昭和48年度】

4月1日，待望久しかった粟田小学校が開校し，町内の学童は県道を横切って，真新しい学校に通うようになった。それに伴う県道の歩道橋も，スロープ式を加えたものをと，陳情を繰返し，

ようやく次年度着工の見通しとなった。また、町内での交通事故防止のため、十字路の擁壁に所有者の快諾を得て、百か所にも及ぶ標識が描かれた。

この年度内に起った大きな問題の一つに、全県的な視野から示された、地域開発・土地整備計画がある。さらにそれを受けて、横須賀市から用途地域の具体案が出された。それによると、県道沿いは第二住居地域、南西側の山林は市街化調整地域となっている。

吾々がこの地を選んで居住したのは、他にも理由はあろうが、大方の人々は、緑の山々に囲まれたこの静かな環境を好んでのことではなかったか。吾々は自然保護、環境保全の立場から、強力な陳情を行なうことになった。町内の人々の力強い協力で、署名運動を展開し、陳情を繰返した。その結果、県道沿いは第一住居地域となり、南西周辺の山林は、個人の所有から売却されて社有地とはなっていたが、自然保護の立場から開発は許可しないことになり、その他散在する個人所有山林は保安林として存続することになった。

通報サイレン放送施設が完成し、非常災害時の通報に備えることになった。

また、空地の雑草（冬季は枯草で危険）の処置について、土地の所有者に依頼すると共に、消防署からも警告してもらおう準備にとりかかった。

更に、最大の関心事となっていた、住居表示変更の問題は、49年6月乃至10月の市会で決定することになるので、ふさわしい町名を考えてもらいたいとの市の意向であった。いよいよ住民全体に呼びかけて、親しみやすく、書きやすく、この地の風土にも合った、而も、他の地区にない町名ということで応募してもらった。町名候補57種、そして投票、検討、さらに投票の末、粟田（あわた）と決定した。（昭和50年3月1日より新住居表示実施予定）

#### 【昭和49年度】

住民の大きな関心の的である「住居表示」の実施の年に当たっているので、4月21日開催の定期総会に於て、さきに実施したアンケートの結果に基づき、改めて正式に町名を「粟田」とすることに決定した。そこで直ちに市当局に上申し、その後数度の公聴会、委員会の議を経て、市議会に提案、承認可決の後、昭和50年3月1日から新町名で発足することとなる。

次に7月8日未明の台風8号による集中豪雨は、短時間に例年の約2か月分に相当する250ミリもの雨量をもたらし、横須賀市全域に亘って床上、床下浸水、がけ崩れ等大きな災害を及ぼしたが、わが粟田は立地条件の良さもあって、大した被害もなく、無事災害を免れ得たことは、誠に幸いであった。

次いで、かねてより設置してある緊急時通報サイレンの有効利用について、一定時刻に音楽を放送し、特に夕刻遊んでいる子供達に帰宅の意味も含めて、午前6時、正午、午後6時（11月30日から翌年2月末日までは午後5時）の3回放送することに決定、9月の取付け完了以降実施することとなった。

また、大きな事業の一つである町内会発足5周年記念の「町のあゆみ」を編集し、昭和50年1月末に完了、3月に発行した。

### 【昭和50年度】

当町内会も昭和45年1月発足以来一応の節目である5年間も経過し6年目を迎えることとなった。町名も町内会設立後暫らくは「野比」であったが、昭和50年3月1日住居表示の実施により「栗田」と変更になったので、4月20日開催の定時総会で

1. 町内会名を「野比北」から「栗田」に
1. 町内区画を15区画から19区画に
1. 庶務の事項のほか町内の財産である土地・建物・備品・什器等を管理する部として総務部を新設

した。次に5月定例理事会でシンボルマーク入り町内会旗制定の件が審議され公募した結果、13区五十嵐長儀氏の作品が、また7月に公募した「明るく住み良い町づくり」の標語として1区大島弘江様の「町の和はまずお早ようと笑顔から」が入選と決まり、いずれも8月実施の納涼大会の会場で発表並びに表彰式が行なわれた。次に本年度から町内居住の高令者に対し敬老祝金を、新成人に祝品を贈ることとなり、9月15日敬老の日に満70才以上の高令者63名に敬老祝金として金一封を、1月15日成人の日に新成人24名に祝品を贈呈した。

次に12月25日、緊急放送用チャイム建設用地として第百土地株式会社から野比123番地58、地目山林166.7㎡を購入した。

51年2月の定例理事会で決議された「栗田音頭」公募の件は6区山本正治氏の作品が採用され51年度納涼大会で発表するべく振り付け並びに作曲を依頼することとなった。

次に表彰関係としては、①6月1日に町内会館で成田町内会長が町内会設立後引き続き町内会長として町の発展に寄与された功績に対し町内会から感謝状並びに記念品を、②8月14日、14区川内惣助氏が納涼大会会場で自宅周辺及びバス停附近の除草清掃等町内美化運動を積極的に推進協力した努力に対し町内会表彰を、③10月30日、栗田町内会が県立音楽堂で開催された「昭和50年交通安全県民総ぐるみ大会」で神奈川県警本部長より交通安全優良町内会として表彰されたほか、④51年1月20日、町内会長が市主催の市内町内会長会の席で町の発展に尽力した功により横須賀市長から表彰された。

そのほかこれまで同好者の集りであった民謡・詩吟・囲碁・将棋・フォークダンス・卓球・柔軟体操・ソフトボール・書道・絵画・バレーボールが正式に同好会として認められた。なおその後、盆栽会・箏曲の会が加わった。

上記のほか、①町内会として栗田地区テレビ共同受信組合（テレビの見えにくい地区の人で構成）の設立に協力した。②町内会活動の活発化に伴い将来に備え本年度から町内会館改築準備金

を積み立てることとし、取り敢えず本年度分として金50万円を別途積み立てた。

#### 【昭和51年度】

本年度は昭和51年3月中央公園に公衆用トイレの建設が始まったが、これは町内会として設置方陳情したものでなく一部の住民から市に対し直接設置してほしい旨の要望があり市が予算化して建設に着手したものであるが、汲み取り式のため近隣居所から臭気及び保健衛生上の見地から中止してほしい旨の要請があり数度の検討会を開き水洗化にするよう陳情したが、その結果は現時点では工事中止は出来ないが出来得る限り早い機会に水洗化するよう努力する旨の確約を得た。

次に8月12・13・14日の3日間に亘り中央公園で納涼大会が盛大に実施されたが、その会場で先に公募採用された町内会旗（正・副）及び粟田音頭が披露されたほか商店会主催による子供用樽みこし二基も町内を練り歩き子供達に大変喜ばれた。また秋には町内作品展が開催され一般並びに子供会から書・絵画・写真・手芸品等が出品展示され、婦人部によるおでん・綿菓子の安売りもあり大好評裡に終了した。

次に9月15日敬老の日に満70才以上の高令者65名に敬老祝金を、1月15日成人の日に新成人30名に祝品をそれぞれ贈呈した。

次に表彰関係としては、①7月18日、町内会館で加藤副会長が町内会発足以来役員として町内会の発展に尽力された功績により町内会から感謝状並びに記念品を、②8月18日、粟田子供会が県立青少年センターで優良子供会として、また11月6日、横須賀市から、更に11月22日、浦賀交通安全協会・浦賀警察署から交通安全運動に協力した廉によりそれぞれ表彰された。

そのほか町内会館改築準備金として本年度分金70万円を別途積み立てた。

#### 【昭和52年度】

本年は、ここ数年来の懸案になっていた町内会館改築の件であるが、12月開催の定例理事会で諸物価値上がり傾向にある折柄出来得る限り早い機会に工事に着手した方が良いとの結論に達し、会館改築準備委員会（会長・副会長・会計・各部の部長及び顧問で構成）を設け細部について検討することとなった。

次に恒例の納涼大会は8月11日から13日までの3日間行う予定であったが、13日は生憎くの雨となり中止の止むなきに至り誠に残念であった。

9月には野比中学校が開校され、それまで久里浜中学校に通学していた当団地居住の生徒は新設の学校で授業を受けることとなった。

次にこれまで理事が届けていた敬老祝金を本年度からは該当者を町内会館にお招きして祝賀の宴を催しその場でお渡しすることとなり、9月15日敬老の日に満70才以上の高令者60名を招待し

たところ35名の出席があり、婦人部の方々の接待に加え民謡同好会による歌と踊りのアトラクションを交え極めて盛会裡に終了し大変に喜ばれた。

次に11月1日、町内会館に待望の電話が設置され非常に便利になった。

11月20日には町内会館と公園広場を会場にして町内文化祭を催し大人子供計 265点の出品作品を展示し、アトラクションとして民謡同好会の三味線及び尺八の伴奏による粟田音頭ほか数曲目の踊りのほか、婦人部によるおでん・綿菓子コーナー・衣料品販売等あり大好評であった。

次に表彰関係としては納涼大会の夜、14区川内惣助氏に町内会から町内美化運動推進の功により感謝状と記念品を（なお同氏は10月8日、京浜急行電鉄株式会社から、更に2月15日市制記念日に横須賀市からも同様の趣旨による表彰を受けた）。10月25日、粟田町内会が長谷川四郎建設大臣から都市公園の美化と都市緑化の努力に対し表彰を、3月には副会長大竹庸悦氏に対し町内会から町の発展に尽力された功績に対し感謝状と記念品を贈りそれぞれ表彰された。

また本年度から野比中学校卒業生に北下浦青少年推進の会名で記念品を贈ることとなり、該当者50名に記念品を贈呈した。

右のほか町内会各種同好会に本年度から助成金が交付されることとなった。町内会館改築準備金は本年度分として金70万円を町内会費より支出し別途積み立てた。

#### 【昭和53年度】

本年度事業計画の中で最も大きな関心事は町内会館増改築の件である。本件については既に昭和50年度から毎年改築資金を積み立てるほか昭和52年12月18日発足した会館改築準備委員会で慎重に検討中であつたところ構想がほぼまとまつたので、53年度の終り頃（54年2月頃）臨時総会を開くべく12月24日町内会だより第71号で内示したところ、現状の敷地では増築部分の基礎を打つことが出来ないとのことで急遽総会開催を取り止め更に検討することとなった。

次に兼ねてから通勤者の利便を図るため京急に陳情中であつたバスの増発が認可になり、4月1日から早朝焼木坂発野比行5時42分、野比駅発焼木坂方面行終バス22時は運行されることとなった。次に継続陳情中であつた中央公園設置の公衆用トイレの水洗化が10月に完了した。納涼大会は8月3日から5日まで実施され、台風の接近に伴い天候が懸念される場所であつたが大したこともなく無事終了することが出来た。特に本年は子供達による「のど自慢大会」が催され大変喜ばれた。次に町内会初めての試みとして11月10日、紅葉の美しい秩父多摩国立公園秋川溪谷に日帰り親睦バス旅行を催したところ89名の参加者があり、バス2台に分乗し澄み切った青空の下楽しい一時を過ごした。

次に11月19日実施の文化祭には大人・子供計325点の書・絵画・写真・手芸・盆栽等が出品され、部門別に人気投票の結果1位から3位までに賞品が贈られた。

表彰関係としては10月30日、婦人部が昨年度中に実施した諸活動に対し横山市長から、11月22

日、当町内会が交通安全の啓蒙と技術指導に顕著な功績ありとして浦賀警察署長から表彰された。  
(本件については同時に町内会長及び交通部長に対しても同趣旨の表彰があった。)

以上のほか町内会館改築準備金として本年度も金70万円を町内会費より支出し別途積み立てた。

#### 【昭和54年度】

前年度に引き続き会館改築準備委員会で検討中であった町内会館改築の件は構想もまとまり、昭和54年12月2日臨時総会を開催し会員多数の出席を得て慎重審議の結果、次年度以降に於ても極力諸経費を節約して借入金返済に充当し会員の負担を軽減されたい旨の決議を付して賛成者多数で次の通り可決された。

1. 増改築はする。改築規模は一部鉄骨入り木造二階建とする。
2. 工事費は14,000,000円(追加工事費を含め金14,302,605円)資金計画は積み立て金のほか三浦信用金庫より返済期間2年間の予定で金7,000,000円を借入れる。会員には55年1月より満2ヶ年を限度として一世帯当り1ヶ月金300円を負担していただくこと。
3. 工事請負業者は横須賀市長沢315番地栗橋建築とする。
4. 市に対しては出来得る限り速やかに補助申請をする。

右により2月10日上棟式も終り以後の工事日程としては屋根葺き、外部工事、内部造作工事の順で4月中旬には完成の運びに至る予定で工事に着手することとなった。

次に恒例の納涼大会は8月2日から4日まで開催し、中日には子供みこし二基町内を巡行、最終日には子供のど自慢大会・フォークダンス等もあり盛会裡に終了した。

11月には文化祭を開催したほか多数の参加を得て三保ダム・中川温泉郷にバスによる日帰り町内親睦旅行会を催した。

表彰関係としては5月19日、加藤副会長が衣笠行政センターで催された全市町内会長の集いで永年に亘り町内自治活動に尽力した功により横須賀市長より表彰された。

そのほか町内会館改築準備金として本年度も町内会費より金200万円を支出した。

#### 【昭和55年度】

本年度は待ち望んだ町内会館の改築も終り4月末に引き渡しを受けたので、6月8日午前10時から横須賀市長ほか関係者多数の御参列を得て新築落成祝賀会を催した。当日は生憎くの悪天候であったが町内会役員並びに婦人部の方々のお骨折りにより無事盛大に終了することが出来た。以後町内会活動が活発順調に行なわれることとなった。

次に恒例となった町内親睦旅行は11月6日、参加者80名、2台のバスに分乗して久里浜からフェリーで千葉に渡り南房パラダイスを経て花と海女と灯台の街白浜に遊ぶ南房総日帰りバスの旅を催し、当日は気候温暖快晴で楽しい一日を過ごした。次に納涼大会は7月31日から8月2日ま

で（最終日は降雨のため中止）、文化祭は11月3日、完成した町内会館で書・絵画・写真等86点を展示しアトラクションも交え盛況裡に終了することが出来た。なお本年度からは出品者は大人に限定することとなった。

12月19日は待望の浦賀警察署粟田駐在所が開所され大坪巡査が着任され粟田のほか岩戸方面の治安確保に当られることとなり、意を強くした次第である。

表彰関係としては10月14日、粟田子供会が交通安全運動に協力した功により神奈川県交通安全協会から、10月22日、成田会長が同様の趣旨により神奈川県警本部長から表彰を受けた。

そのほか町内会館改築費として本年度分町内会費より金150万円を支出した。

### 【昭和56年度】

本年度は、昭和55年1月から2年間の予定で協力していただいた町内会館建設借入金の返済は、成田会長の精力的な募金活動の結果多額の寄付金が集ったことと会員皆様の絶大な御援助等により56年3月までの15ヶ月間で完済することが出来たので、4月25日開催の定時総会で会長からその旨を報告したほか、町内会規約の一部改正を行い本年度から基金（当町内会が無から充足したため備品等購入に充てるため町内会設立頭初から会費のほかに金100円宛負担していただいたもの）の徴収を取り止めることとした。

次に好評のため恒例化した町内親睦旅行は7月12日、81名の参加を得て秩父長瀬の探勝と舟下りを楽しんだ。次に納涼大会は7月30日から8月1日までの3日間開催したが、初日雨で中止となったほかは好天に恵まれ盛大であった。文化祭は11月3日に開催され、会員力作の諸作品が展示されたほかアトラクションとして民謡・踊り・詩吟・フォークダンス等があり、そのほかおでん・綿菓子等も販売され賑やかなうちに終了することが出来た。9月15日敬老の日には町内会館に該当事88名中63名が出席され、民謡・踊り・詩吟のほか浦賀警察署藤堂様の手品等が披露され大変喜ばれた。また本年から新成人を町内会館に招待してその席上でお祝品を贈ることとなり、1月17日(日)、多数の参加を得て賑やかにお祝いをした。

表彰関係としては11月、粟田町内会が防犯活動及び防犯連絡所の整備拡充に協力したことにより浦賀防犯協会・浦賀警察署長から表彰された。

### 【昭和57年度】

本年度納涼大会は7月29日から31日まで3日間に亘り盛大に催されたが、本年は商店会が力を合せて作った本格的な子供みこしのほか、山車（だし）も参加することとなったため町内会とは別個にみこし世話人会を設けることとなり、町内会から4名（会長・副会長・文化部長）、商店会から4名、その他一般の町内会員から4名の委員で構成することとし、以上の代表に15区加藤春治氏が選ばれみこしの先導をして町内を巡行した。次に9月19日、町内親睦日帰りバス旅行を

催し、参加者51名で初秋の昇仙峡に出掛け溪谷美とぶどう狩りを楽しんだ。また11月3日には文化祭を催し、参加作品85点が展示されたほか民謡・踊り・琴・詩吟等のアトラクションのほか婦人部によるおでん及び商店会による大廉売市が開かれた。

表彰関係としては栗田子供会が5月に神明小で実施された交通安全子供自転車大会で優勝し7月実施の県大会で見事10位に入賞し表彰されたほか、12月に交通安全活動で関東管区警察局長から表彰された。

#### 【昭和58年度】

本年最大の関心事は初めての試みである「ゴミ分別収集」が実施されることとなり、7月8日及び同月11日の2日に亘り午前午後計4回の説明会が開催され、いづれも多数の主婦が出席し熱心に質疑応答がなされ、8月1日から次のように実施された。

1. 燃せるゴミ 毎週月・木曜日
2. 燃せないゴミ（プラスチック類） 毎週金曜日

次に恒例の納涼大会は7月28日から30日にかけて3日間、文化祭は11月3日午前10時から午後3時まで行われた。いづれも参加者多数あり極めて盛大であった。

町内親睦日帰りバス旅行は9月11日、参加者134名という今までにない多人数で伊豆河津七滝めぐりと河津温泉郷探訪の会を催し、天候にも恵まれ老いも若きも一つになって楽しい一日を過ごし町内の人々との親睦に大きく寄与することが出来た。

また11月20日には町内会館に対し業者による白蟻等の害虫駆除消毒を、12月4日には婦人部を中心に町内会役員有志による町内会館の大掃除を行なった。

次に2月、岩戸団地集中浄化槽跡地利用計画として自治活動センター（仮称）の建設を市に陳情した。

表彰関係としては12月22日、当町内会に対し多年に亘る警察行政への協力に対し浦賀警察署より感謝状が贈られた。

#### 【昭和59年度】

本年は町会設立後満15周年に当るので6月開催の定時理事会で「15年誌刊行」の件が決議され、具体的作業の進め方として編集委員会を設置することとなり、委員として成田会長、岡・山本副会長、倉持会計、各部の部長、八木沢・加藤両顧問のほか全役員が参画して町内皆様の意見を聞き資料とした上で発行することとし、町内会だより第138号及び第139号で

1. 栗田に関する随想・記録その他建設的な意見
2. 町会の過去の行事写真のほか栗田近辺の風景写真等を公募し、1月末発行の予定で鋭意作業を進めている。

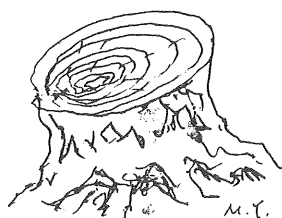


次に恒例の納涼大会は8月2日から4日まで中央公園で実施され最終日には子供みこし・だしの町内巡行もあり盛大に実施された。

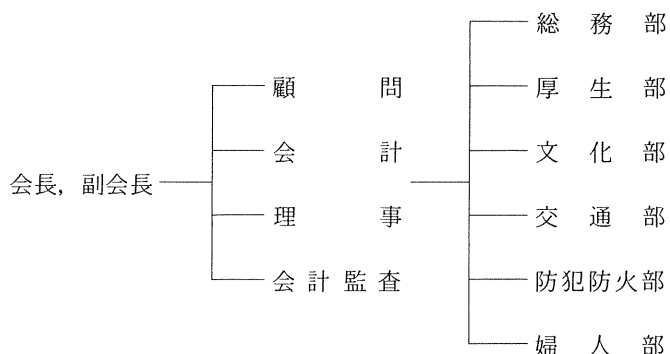
敬老祝賀会は9月15日、町内会館に該当者をお招きし115名中66名の方が出席され、同好会による民謡・舞踊・詩吟に加え流行中のカラオケも出て楽しさいっぱいの雰囲気終了した。文化祭は11月4日、町内会館で絵画・書道・写真等多数の応募作品を展示したほか盆栽愛好会の丹精された立派な作品の出品もあり、また婦人部のおでんの販売もあり大好評であった。更に会館二階では老人会（緑会）の有志で組織している煎茶の会の先生並びにお弟子さんによるお茶席が設けられ特に喜ばれた。このお茶席は新しい町内会館が出来た昭和55年から毎年文化祭当日に催されて来たものである。

町内親睦バス日帰り旅行は9月30日、参加者96名、バス2台で奥多摩鳩の巣溪谷方面に行き晴天の下楽しい一日を過ごし町内の人々との親睦の和を拡げることが出来た。

以上のほか町内会各部の理事は毎会計年度毎に別表町内会組織表（次の項）に掲げる各部別年間事業を企画立案し、町内会長ほか役員一体となって「明るく住み良い町づくり」に励んでいる。



## 町内会組織表



## 各部別年間事業

### 総務部

- 1 理事会議事録作成
- 2 町内会だより発行
- 3 老人に祝賀行事の実施
- 4 成人者にお祝いの記念品贈呈
- 5 中学校卒業者に祝いの記念品贈呈

### 厚生部

- 1 大型ゴミ処理の指導
- 2 生ゴミ集積所看板の取替と書替補修
- 3 浄化槽清掃一括申込み受付と処理依頼
- 4 共同募金の協力集金業務
- 5 町内リクリエーション立案と実施

### 文化部

- 1 納涼大会の企画立案と実施
- 2 文化祭の企画立案と実施

## 防 犯 防 火 部

- 1 防犯街路灯の修理受付と修理工事の発註
- 2 不在地主所有地の除草要請
- 3 消火器の一括購入の斡旋
- 4 防犯と防火講演会の立案実施
- 5 納涼大会時の町内パトロールの実施

## 交 通 部

- 1 交通安全標識の整備
- 2 交通安全教育の立案実施
- 3 納涼大会神輿の交通許可申請
- 4 交通災害共済保険団体一括加入手続業務の実施
- 5 町内交通安全壁面標示と立看板の補修
- 6 バスから電車への連絡時間の調査検討と、その交渉業務

## 婦 人 部

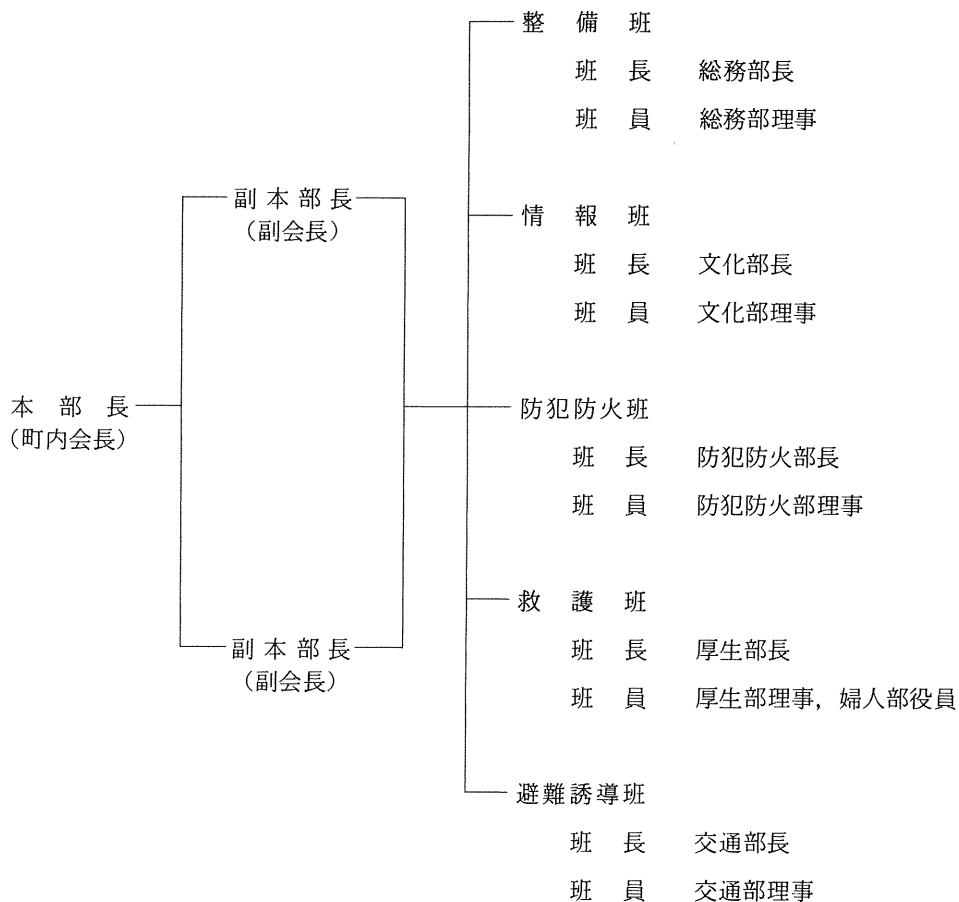
- 1 講演会の立案実施
- 2 各種講習会の開催実施
- 3 町内各地区別懇談会の実施
- 4 物品販売の斡旋
- 5 ゴミ集積所の清掃
- 6 県道粟田近隣バス停留所の清掃と周辺の植込みの除草
- 7 クリーン横須賀市民運動に参加協力
- 8 ボランティア活動に参加協力

以上各部門別にこれまで継続しておこなわれて来た事業活動の骨子的なものをあげて見たが、それ以外に厚生部のなかに含まれる、みどり会(老人会)、文化部には(子供会)、婦人部には(交通安全母の会)などがあり、これらは下部組織として活動し、それぞれ効果をあげている。

町内の大きな行事の一つに、文化部が主体となる納涼大会、文化祭などがあるが、役員も一体となりよりよき行事の達成に努力している。

その他、必要と認められる新しい事業が発見された場合は、理事会に於いて慎重審議のうえ決議に従い採用実施している。

## 町内非常災害時防災組織



## 防 災 時 心 得

防災時には町内防災組織を基本とし、防災本部を栗田町内会館内に設置する。事態状況により使用不能と判断した場合は町内中央公園内に設置する。また災害が予想外の大規模であり、市の指令警報が出されたときは市の指令に従い行動を共にする。テレビ、報道機関に細心の注意を払い状況の把握に努める。

## 大地震の心得

- 1 ガス栓を止め、先づ火の始末
- 2 安全場所に身をよせ状況を待つ
- 3 あわてて外に飛び出さな
- 4 火が出たら、まず消火
- 5 避難は徒歩で
- 6 走行車輛はキーをつけたまゝ左側に止める
- 7 へいぎわ、がけなどに近寄るな
- 8 がけくずれ、地すべりに注意
- 9 海の近くは津波、低地では浸水に注意
- 10 余震あっても沈着に、デマに迷うな
- 11 秩序を守り、衛生に注意
- 12 その他

以上の外、非常持出品の点検整理し、いつでも持出し出来るよう一定の場所を定め家族に周知せしめ、災害の状況に対処出来る持出者をあらかじめ決めて置く。

## 大地震による二次火災の心得

大地震による二次災害の火災が発生した場合、消防車の救援を要請しても、この場合出動は不可能と判断しなければならない。

従って自力消火活動を覚悟しなければならないだろう。日頃の心構えとして次のことが必要となる。

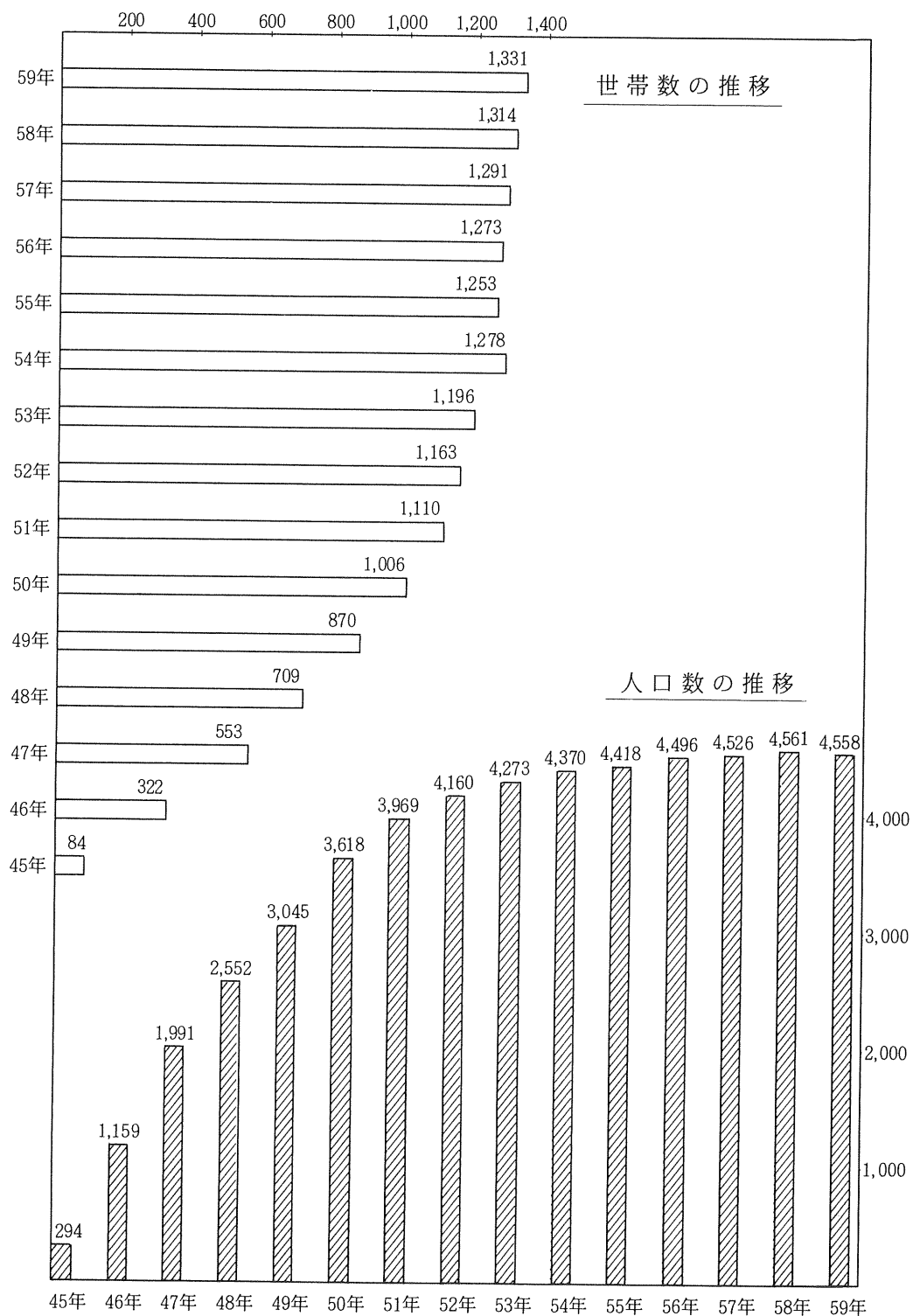
- 1 消火器はいつでも使える状態に
- 2 浴槽にはいつでも水を
- 3 火災が起きたら初期消火に全力を
- 4 非常持出品搬出

## 粟田町内会資産一覧表

59. 12. 31 現在

番号	名 称 (品 目)	数 量	取得金額	取得年月日	備 考
1	天幕	2	30,000	47. 7. 11	
2	ガストーブ	1	22,000	47. 12. 13	RN202
3	アンプ	1	66,000	47. 12. 19	T.A 2480
4	レコードプレーヤー	1	20,000	48. 8. 6	P.L 12 E
5	屋外拡声装置	1	122,700	48. 11. 30	
6	ミュージックサイレン	1	63,000	49. 9. 20	
7	物置	1	127,350	49. 10. 16	
8	会議用テーブル	5	76,000	50. 6. 24	15,200 × 5
9	折たたみ椅子	10	27,500	50. 6. 24	2,750 × 10
10	会議用テーブル	1	15,700	50. 6. 24	
11	アンプ	1	64,000	50. 7. 30	T.A 30 R Z
12	町会旗 (正)	1	88,000	50. 8. 12	
13	〃 (副)	1	19,000	50. 8. 12	
14	土地	166.7 $m^2$	30,000	50. 12. 25	(地目山林)
15	扇風機	1	11,500	51. 7. 18	
16	カセットラジオ	1	41,520	51. 7. 18	
17	紅白幕	1	30,400	51. 8. 11	
18	物置	1	45,600	52. 3. 30	
19	リコピー機	1	198,000	52. 5. 30	5 P 205
20	引違書庫	1	60,000	52. 11. 26	
21	扇風機	1	7,680	53. 7. 8	
22	綿菓子機	1	55,000	53. 7. 29	
23	紅白幕	1	————	54. 8. 2	粟田商店会寄贈
24	携帯マイク	1	22,000	54. 10. 10	
25	町内会館	1	14,303,605	55. 4. 30	木造 2 階建
26	黒板	1	34,000	55. 5. 28	
27	消火器, はしご(ロープ)	1	36,000	55. 9. 26	組
28	ガストーブ	1	32,800	55. 10. 24	
29	レックス製版機	1	300,000	56. 3. 25	型 23335
30	レックス謄写機	1	220,000	56. 3. 25	型 93830
31	ガストーブ	1	32,800	58. 10. 17	
32	天幕	1	60,000	58. 9. 7	
33	〃	1	60,000	59. 8. 1	

## 栗田の人口，世帯数の推移 (59年11月北下浦支所調査)



## 同好会と町内会館使用状況

昭和50年5月、町内の皆さんに呼びかけ文化活動の一環としてスタートした。

当初結成された同好会は民謡(唄)、写真、短歌、囲碁、将棋、バレーボール、フォークダンス、卓球、盆栽会で、この中で写真、将棋、詩吟は自然解消となったが、詩吟は再度結成され今も活発に活動している。又バレーボールは婦人部中心にスタートしたが、自然中止になり現在のバレーボールは男子バレーボールに変わった。

以上、幾多の変動があったが現状は12の同好会があり、いずれも活発に活動をしている。同好会の種類と会館使用関係は次の表のとおりである。

同好会名	責任者	会員数	練習日	場所
民謡	松本 禮次	15名	月4回	町内会館
詩吟	宇津見 喬	11名	月4回	〃
囲碁	北沢 正年	24名	月4回	〃
フォークダンス	広瀬 睦子	26名	月4回	〃
卓球	大串 穰	39名	月4回	粟田小体育館
盆栽会	大野 泰雄	54名	随時	町内会館
柔軟体操	北 れい子	43名	月4回	〃
ソフトボール	梶原 泉	35名	月4回	粟田小校庭
書道	佐久間 陽子	22名	月4回	町内会館
絵画	秋山 とし恵	9名	月2回	〃
琴	田中 恵美子	12名	月4回	〃
バレーボール	加藤 治男	12名	月4回	粟田小体育館

(以上、昭和59年9月調)

老人会や子供会で定期使用は次の通り。

踊り(民謡)	12名	月4回	町内会館
煎茶	11名	月3回	〃
囲碁		月4回	〃
子供会 貸本		月4回	〃



その他

町内会例会、婦人部例会、子供会例会 月に各1回 会館使用

町会の組織活動には随時使用している。

利用したい方には部屋が空いている場合は貸している。

町内会館使用規定により運営している。

以上、簡単に説明したが2階建に建替（4部屋）でよかったと思います。前の会館（2部屋）では使用出来ない方がいたと思います。

## 住居表示の変更

昭和44年当初からぼつぼつ粟田に新築が始まった。「横須賀市野比〇〇〇〇番地」が当時の住居表示であった。野比の北方にあることから、町内会名も「野比北町内会」としていた。

昭和48年8月末、市当局の住居表示変更についての説明会があり、これを受けて町内会も町名変更に乗り出した。住民のみなさんの、新しい町づくりへの希望と熱意で、48年末、各世帯から応募された新しい町名候補は90余に達した。そして、その中から「あてよみ」、「野比」入り、「市内他町名と同じかまぎらわしいもの」を除外して57候補となった。49年1月中旬、全世帯による第1回投票で13候補にしばらく、2月中旬、第2回投票の結果「粟田」が選ばれ、更に4月21日の総会で正式に決定した。

更に市の手続き等を経て、新しく住民表示が実施されたのが昭和50年3月1日からである。

（町名は粟田=あわた、小学校名は粟田=あわた）

## 町内会旗

昭和50年、町内会も戸数800を数える程に発展増大して来た。

町内会の象徴としての町内会旗をつくったらと云うことが話題にのぼり、昭和50年5月の理事会で町内会旗の図案を一般町内会員より募集することに決定した。

募集の中から検討協議により巻頭の写真の通りきまり、昭和50年8月、正副2旗作製し立派な粟田町内会旗が出来た。

（正）

生地は濃い緑

図案と房は黄色

粟田町内会は白く染抜いてある

製作費 88,000円

（副）

生地は濃い緑

房はなく図案黄色

粟田町内会は白く染抜いてある

製作費 19,000円

### 町内会年度別役員表

年度 期間 役職	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年	昭和55年	昭和56年	昭和57年	昭和58年	昭和59年	備考
	45. 1. 18～ 46. 3. 31	46. 4. 1～ 47. 3. 31	47. 4. 1～ 48. 3. 31	48. 4. 1～ 49. 3. 31	49. 4. 1～ 50. 3. 31	50. 4. 1～ 51. 3. 31	51. 4. 1～ 52. 3. 31	52. 4. 1～ 53. 3. 31	53. 4. 1～ 54. 3. 31	54. 4. 1～ 55. 3. 31	55. 4. 1～ 56. 3. 31	56. 4. 1～ 57. 3. 31	57. 4. 1～ 58. 3. 31	58. 4. 1～ 59. 3. 31	59. 4. 1～ 60. 3. 31	
会 長	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	成田金治郎	
副 会 長	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	加藤 正元	近藤 幸雄	後藤 常正	加藤 正元	加藤 正元	山本 正治
	本間 茂夫	本間 茂夫	八木沢嘉一	八木沢嘉一	大竹 庸悦	大竹 庸悦	大竹 庸悦	大竹 庸悦	大竹 庸悦	近藤 幸雄	近藤 幸雄	後藤 常正	岡 健治	岡 健治	岡 健治	岡 健治
会 計	熊井 則彦	加藤 正元	加藤 正元	原田 富夫	田中 芳之	五十嵐長儀	五十嵐長儀	五十嵐長儀	五十嵐長儀	五十嵐長儀	五十嵐長儀	加藤 正元	加藤 正元	倉持 辰治	倉持 辰治	倉持 辰治
	大野 用博	原田 富夫	原田 富夫	田中 芳之	今井フヂ子	松本 禮次	松本 禮次	松本 禮次	松本 禮次	松本 禮次	松本 禮次	倉持 辰治	倉持 辰治	篠崎 幸生	篠崎 幸生	篠崎 幸生
会計監査	大竹 庸悦	笠原 安治	横山 民徳	長尾 参治	黒田 嘉男	黒田 嘉男	黒田 嘉男	小原 昇	小原 昇	山内 章孝	山内 章孝	山内 章孝	山内 章孝	八木 清暉	八木 清暉	八木 清暉
	高橋 欣也	牛久保祐治郎	善 吉一	加藤 正元	戸倉 鎮雄	戸倉 鎮雄	戸倉 鎮雄	小池 豊	小池 豊	高梨 進	高梨 進	高梨 進	高梨 進	種橋 正亘	種橋 正亘	種橋 正亘
顧 問					八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一	八木沢嘉一
					山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	山本 正治	加藤 正元
理 事	区	・注 総一総務部 文一文化部 厚一厚生部 防一防犯防火部 交一交通部 婦一婦人部 …………… ( ) 内の表示は担当の役職を示す。 ○印は各部の部長を示す。														
	1	笠原 安治	善 吉一	⊗長尾 参治	大竹与四郎	小池 豊	⊙前田 敏	⊙飯田伊佐男	⊙永井 猷昭	⊙佐久間政志	⊙三浦 富雄	⊙橋本 九郎	⊙橋本 博幸	⊙土屋 満徳	⊙山本 勝	⊙星野 昭二
	2	⊙加藤 正元	⊙長谷川久治	榎本与三郎	上野 信行	細江 次郎	⊙内田 伊彦	⊙宮川 亀雄	⊙坪井 浩	⊙高橋 久雄	⊙牧野 進	⊙高橋 秀夫	⊙児玉 信雄	⊙中島 章	⊙齊藤 勝則	⊙加藤 治男
	3	八木沢嘉一	八木沢嘉一	岩内 秀行 高橋 英次	⊙依田 親治	石山 省三	⊙田中 成雄	⊙小曾根 徳	⊙見上 毅	⊙大友 二郎	⊙福谷 尚道	⊙渡辺 庸八	⊙勝沼 昭	⊙東條 武尾	⊙赤羽 俊八	⊙佐藤 忠
	4	⊙塩満 嘉夫	牛久保祐治郎	渡井 信吾	⊙山下 光久	飯塚 光正	⊙田中 弘三	⊙大橋 洋	⊙田辺 行雄	⊙山田 勝	⊙原田 道夫	⊙福田 勇三	⊙齊藤 時治	⊙平津 孝尚	⊙佐藤 文俊	⊙白須 吉男
	5	徳本 米蔵	原田 富夫	⊙疋田 賢吾	米山 昭雄	小原 昇	⊙栗木 邦雄	⊙古川 計介	⊙平戸 重男	⊙長門 謙一	⊙石田 長勲	⊙小松 一雄	⊙五味富海夫	⊙嵯峨野英次	⊙椎野 悌一	⊙井上 富雄
	6	石ヶ谷若松	⊙高橋 謙介	清水 清	戸倉 鎮雄	⊙山崎 保雄	⊙三輪 美薫	⊙色川 幸市	⊙浪形 金治	⊙志賀 昭久	⊙犬塚 弘	⊙河野 孝治	⊙鈴木 誠	⊙奥 阿久	⊙堀 輝次	⊙竹内 操
	7	蓬田 与市	⊙蓬田 与市	宮武 克明	平松 功	⊙藤仲 博己	⊙荒川 庸夫	⊙浅見 輝夫	⊙大懸象治郎	⊙橋本 幸男	⊙山下 啓介	⊙高橋 和雄	⊙込山 貞昭	⊙中川 保次	⊙佐藤 鉄美	⊙佐川 孚
	8		横山 民徳	山岸 孝慶	夏原 浩	坂本 繁夫	⊙堤 章	⊙逸見 義一	⊙高橋 洵	⊙梶原 泉	⊙根崎 稔	⊙大島 健二	⊙加藤 俊雄	⊙奥村 孝司	⊙酒井 宏	⊙木村 文雄
	9			秋場 重雄	出口 勇	佐藤 隆幸	⊙坂口 峰雄	⊙鶴田 秀雄	⊙鈴木 美幌	⊙沢田 満義	⊙山下 邦雄	⊙伊藤 健一	⊙八木 清暉	⊙荒井 幸治	⊙石渡昭次郎	⊙竹井 正夫
	10			⊙曾我 二郎	大森 清	松木 士郎	⊙川部 暉正	⊙小林 弘人	⊙林 武男	⊙山内 章孝	⊙倉持 辰治	⊙大野 晃	⊙橋内 常雄	⊙岡部 公一	⊙横山 実	⊙大塚惣一郎
	11				⊙黒田 嘉男	⊙後藤 常正	⊙稲毛 政一	⊙高梨 進	⊙児玉 三郎	⊙大野 幸一	⊙継 茂	⊙青木 茂	⊙堀井 英雄	⊙鎌倉 光男	⊙沼尾 豊夫	⊙播正 誠
	12				藤平 実	駒崎 明	⊙加藤 毅	⊙田口 翼	⊙海藤 忠夫	⊙植竹 義夫	⊙山田 善久	⊙高橋 精次	⊙蒲沢 宏夫	⊙飯島 敏伸	⊙沼田 勝宏	⊙水上 幸雄
	13				⊙飯島 通	⊙渡辺 良香	⊙松本 英也	⊙佐藤 政則	⊙本田 増博	⊙土屋寅次郎	⊙菊地 安司	⊙水野 賢	⊙種橋 正亘	⊙堀川 敏治	⊙中村 章弘	⊙井戸 敏彦
	14				土屋 三郎	杉浦譲次郎	⊙川内 惣助	⊙宮内絃一郎	⊙秋元 英也	⊙鈴木 勲	⊙有賀 富寿	⊙梶川 弘	⊙中沢 武夫	⊙坂部 敏文	⊙名塚 清一	⊙小野 正
	15				鈴藤 次夫	⊙柴田 尚輝	⊙高橋 幸松	⊙波田野 滋	⊙浜田 和夫	⊙宮田 盛雄	⊙岡 健治	⊙加藤 春治	⊙志村 誠一	⊙平塚 松重	⊙沢登 民雄	
	16					⊙中村 斉	⊙宮坂 輝久	⊙近藤 幸雄	⊙川口 敏之	⊙林 政芳	⊙早乙女好司	⊙後藤謙次郎	⊙田崎 幸夫	⊙桑島 馨	⊙山田 隆	
	17					⊙小林 実	⊙渡辺 徳彦	⊙佐藤 貞男	⊙森 敏郎	⊙津村 茂	⊙高橋 勝義	⊙高橋 敏夫	⊙御殿谷敏勝	⊙風間 勝利	⊙中村 睦夫	
	18					⊙森 英治	⊙柴田富二郎	⊙柴田小太郎	⊙島崎 信芳	⊙小野寺一男	⊙今橋 新一	⊙寺田市太郎	⊙美濃 武男	⊙吉沢 敏夫	⊙阿部日出男	
	19					⊙田中 巖	⊙浜田 道夫	⊙松島 弘	⊙山本 文彦	⊙篠崎 幸生	⊙小沢 馨	⊙山口 健二	⊙田辺 庄一	⊙松本 孝守	⊙小谷 忠	
婦人部長		竹内 キノ	笠原 節子	平戸 藤枝	中村 春子	山本恵理子	木村富士江	小室 乃美	眞壁 浜子	山本 由子	上村 徳子	大矢 和子	堀 規矩子	菅原とも子	逸見 和恵	
老人会長 (緑会)		鈴木 米作	鈴木 米作	伊森 精	伊森 精	伊森 精	伊森 精	伊森 精	伊藤 精	伊森 精	宇津見 喬	宇津見 喬	伊森 精	伊森 精	伊森 精	
子供会長	石ヶ谷若松	宮沢 幸子	志賀 康子	向山路得子	小室 乃美	小倉イソ子	岡部 澄子	梅沢千百合	奥村美代子	宇津見敏子	星野美由紀	樋口 伸枝	竹内 博子	山崎 桂子	庄司 敏子	

## 町 内 会 館

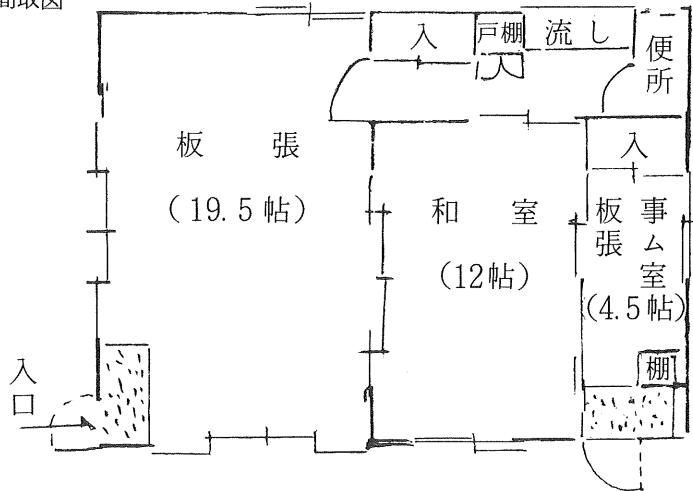


当町内会は昭和45年1月野比北町内会として発足した。昭和50年3月1日より住居表示の変更に伴い粟田町内会と改めた。町会発足当時は諸問題が山積していたので、殆ど毎日のように深夜迄討議検討の連続であった。集会の場所がないので、会館建設竣工まで（昭和45年1月から47年4月）成田会長宅で開催した。

世帯数も増え、又役員理事の数も増えて来たので会場もせまくなった。住民の福祉連帯感をたかめるためにも又人間関係づくりや住みよい地域づくりにはどうしても集会場の会館が欲しい、建設したいと云う機運が次第に高まり、種々検討したが、用地資金、規模、建蔽率等難しい事ばかりで、町会の役員理事一同の日夜検討の結果建築の見通しが立ち、昭和47年1月16日中央公園で臨時総会を開催。会館建設の議案を町会皆さんのご理解を得て承認され、建築することになった。建物は軽量鉄骨、プレハブ平家（作業員宿舎より一寸よい程度のもの）。建坪22.9坪、建築総額2,635,456円。当時の町会役員理事の献身的な努力により昭和47年4月20日竣工。野比北町内会として初めて私達の集会所として使用することになった。

昭和47年より昭和55年改築まで使用の会館は次の間取りでした。

前会館の間取図



次に現在使用中の会館については、昭和47年より平家建の会館を使用してきたが日増しに世帯数も増え、54年には1,150世帯にもなり遂次会館の利用頻度も増えてきたので今迄の会館ではせまくなり、将来を予想すると利用も益々増大することが考えられるので、51年度より増改築のための会館建築資金を積立てて来た。

昭和54年度にはいり理事会で会館改築について種々検討して来た。6月、臨時理事会を開いて

具体的に資金、土地、建築構造、建蔽率等について検討して行くことに決定した。7月の理事会では建築専門委員会を設置し、業者4社より見積りを取り、資金面、構造規模、土地建蔽率等について専門の方々により10回以上も深夜まで検討審議した。専門委員会で検討の過程で常識で考えられない事が起り、建築関係に詳しい人の智恵を借り問題を解決して来た。

建築専門委員会の検討審議も終り、木造2階建、建蔽率も隣地地主の協力により借りることで解決し、昭和54年12月2日、会館改築の臨時総会を開催、下記議案が承認され55年1月より着工することとなった。

議案は次の通り。

- 1号議案 町内会館改築の件
- 2号議案 町内会館改築規模に関する件
- 3号議案 改築工事費ならびに資金計画に関する件
- 4号議案 工事請負業者指名に関する件  
工事施工者 栗橋建築
- 5号議案 町内会館改築工事費補助申請に関する件

資金面については、

建築総額	1,400万円	
内訳	500万円	町内会費積立金
	700万円	三浦信用金庫より借入
	200万円	市建築補助金

700万円の三浦信用金庫よりの借入の返済は、町会の皆さんに1ヶ月300円のご負担をお願いして2ヶ年で返済の予定であったが、寄付金等で予定より早く56年4月に返済することが出来た。

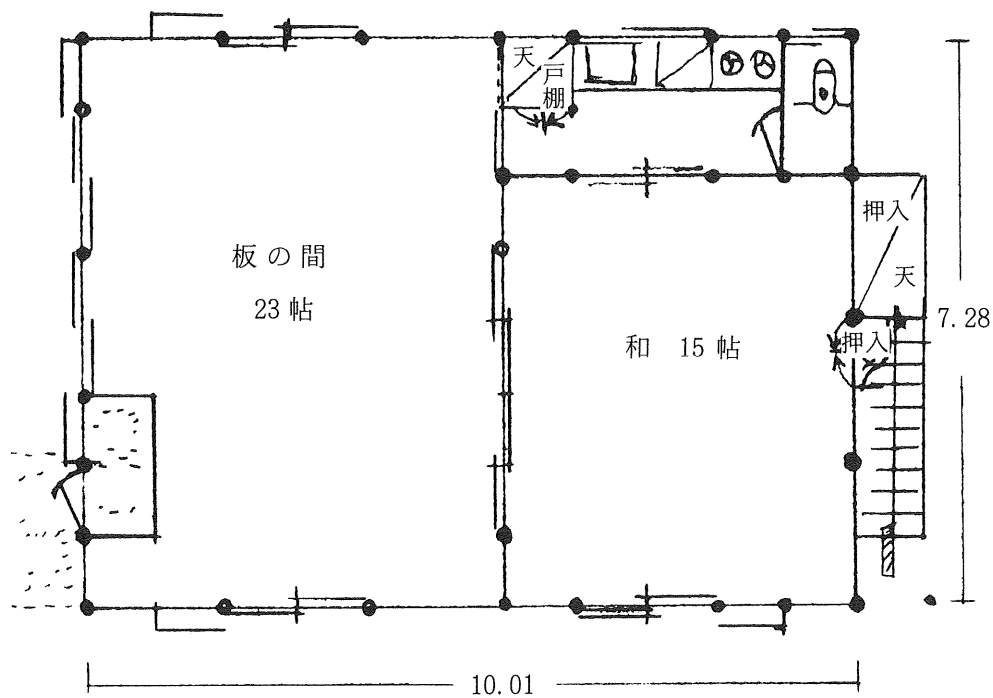
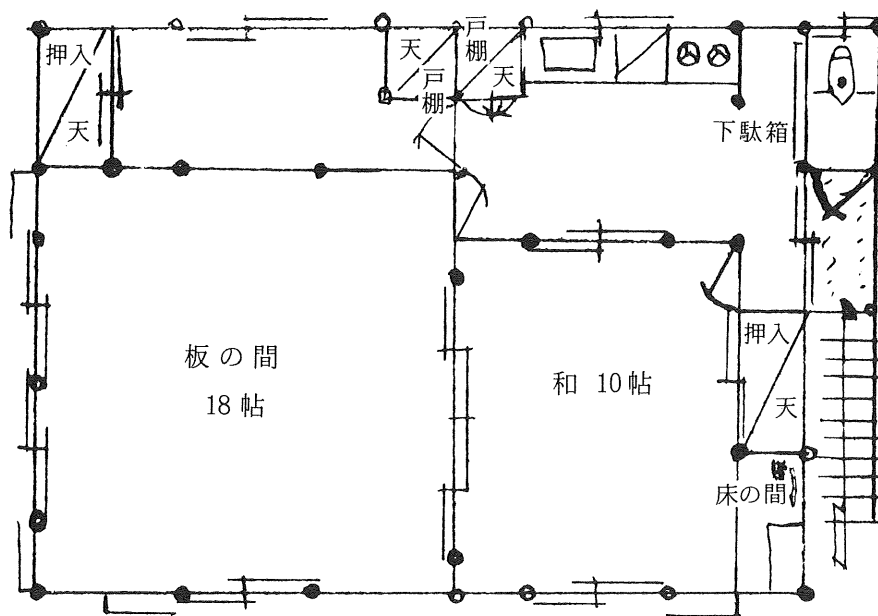
改築工事は55年1月10日に旧会館を解体し、4月上旬に竣工の予定であったが解体着工時間問題があり、工事を一時中止した為4月末に延びた。

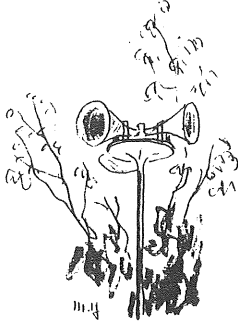
工事施工者 栗橋建築。総工費（追加工事を含め） 14,303,605円。

当時の役員理事の献身的な努力に対し深く感謝の意を表するとともに、町会の皆様のご負担とご協力により立派な会館が出来、毎日のように利用されているが、若し建替えがなければ会館利用に応じ切れなかっただろう。

みんなで大切に使いましょう。

現在の会館間取図





## 栗 田 音 頭

昭和53年栗田音頭の歌詞を、当時町内会の顧問（現在59年度は副会長）の山本正治氏に作詞してもらったので、曲が欲しいということになり、民謡（唄）同好会の先生の小林実氏にお願いして作曲してもらった。

栗田音頭の歌詞、曲が出来たら今度は踊ったらということになり、振り付けを民謡（踊り）の長谷川先生にお願いして出来上った。

以上の経過により唄って踊れる立派な栗田音頭が出来たので、その後は毎年納涼大会で利用されている。

栗田町内にお住いの皆さん、今後もみんなで楽しく唄い、踊りを続けましょう。

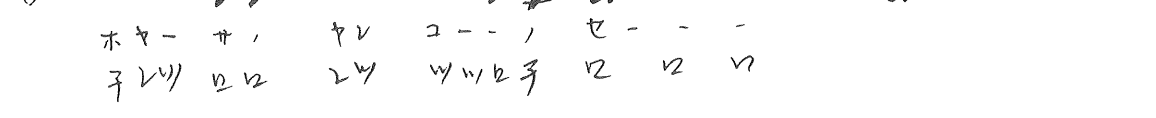
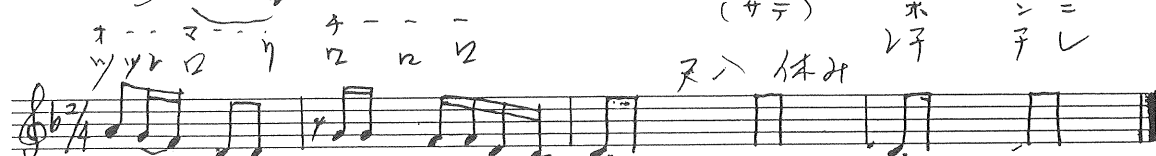
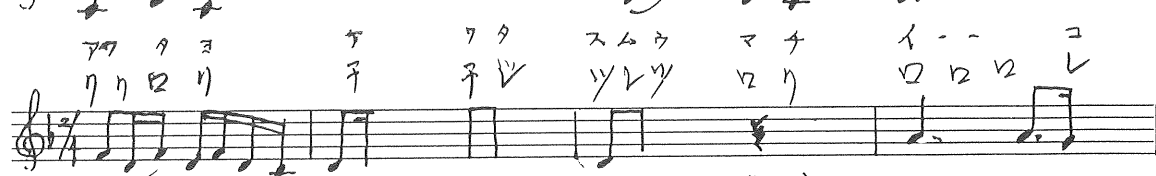
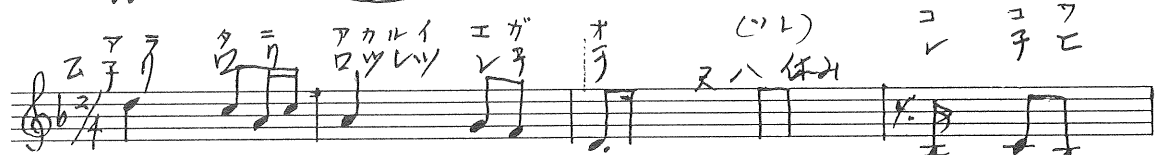
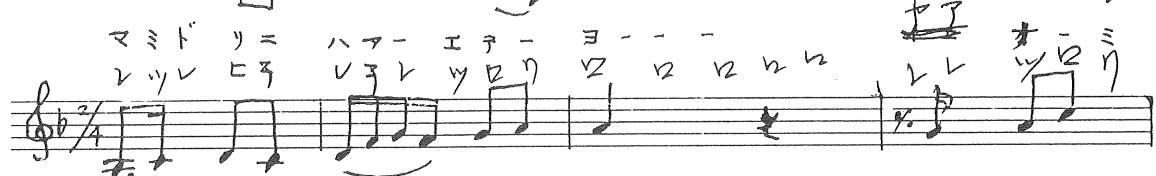
## 栗 田 音 頭

作詞 山 本 正 治

1. ハァー  
野比の北山緑に映えてヨー  
家並新たに明るい笑顔  
ソレ、ここは栗田よここは栗田よ  
栗田住む町憩う町  
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)
2. ハァー  
花は五色に色かえながらヨー  
うつき花咲く丘めぐらせて  
ソレ、ここは栗田よここは栗田よ  
栗田明るい花の町  
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)
3. ハァー  
みんなそろうたあなたとわたしヨー  
移り住んだら都も同じ  
ソレ、ここは栗田よここは栗田よ  
栗田育ちの君と僕  
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)
4. ハァー  
老も若きも輪に輪を重ねヨー  
踊る手拍子踏む足拍子  
ソレ、ここは栗田よここは栗田よ  
栗田人の輪踊りの輪  
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)
5. ハァー  
あちらの山できじばと啼けばヨー  
こちら恋しとすぐ啼き交わす  
ソレ、ここは栗田よここは栗田よ  
栗田小鳥の唄う町  
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)
6. ハァー  
遠い故郷を夜空に偲びヨー  
人の情を手と手につなぐ  
ソレ、ここは栗田よここは栗田よ  
栗田人の和星の町  
(サテ、ホンニホヤサノヤレコノセ)

粟田音頭

作曲 小林淡動



## 栗田駐在所の設置

今の駐在所の建っているところが、幸い予定地として空地であったので、町内会は昭和46年度より住民の治安維持上、駐在所の誘置を事業計画に取り入れ運動をしてきた。ここは浦賀警察署管内で、駐在所設置の陳情書の提出もした。又警察署長の移動が度々あるので、その都度精力的に交渉を重ねてきたところ、昭和49年4月4日付神奈川県知事室県民課より次のような回答があった。新興開発地域が多いので、入居世帯の多い地区としてハイランドに設置するからご承知願いたいとのことだった。ご承知のように先にハイランドに駐在所が設置された。然しその後もあきらめることなく、予定地があるからと精力的にお願いして来た。

昭和54年には1,000世帯を越した。榎本署長さん（当時）の格別のご骨折で、昭和55年12月19日栗田駐在所が開所された。厚くお礼申し上げます。

初代には浦賀警察署で最も優秀な、大坪時寛さんが就任され、今も栗田岩戸の治安維持にあたっておられる。尚、今後の御活躍を期待したい。

## 町内の公園について

町内には宅地造成法に定められた公園予定地が9ヶ所ある。町内会創立当時は戸数も少なかったが年ごとに急増して来たので、昭和46年度より町内会は事業計画に公園整備を組み入れ、市へ陳情書の提出や口頭で整備促進をして来た。その経過は次のような状況であった。

昭和48年7月5日付陳情書の回答で、市は金がないので国や県の補助がなければ整備が出来ないからしばらく猶予してほしいとのことで、仲々公園整備工事が進行しなかった。その後も精力的にお願い（交渉）し、逐次整備され、昭和55年10月に町内全部の公園が整備された。

町内に公園が9ヶ所あるが、その中で1ヶ所2丁目第3公園(町内会館前)は児童遊具は設置されていない。これは市へ強力にお願い(交渉)してスポーツ公園にしてもらった。スポーツ公園にした時は、小学校々庭は勿論体育館などなかったから、せまいけれどスポーツの場所として使用してきた。

近所の方々はバレーボール・バドミントン・テニス等に御使用下さい。子供(児童)も路上で遊ぶと危険ですから公園で遊ばせて下さい。町内公園の配置は次頁町内会区画図にあります。



栗田町内会区画図



## 粟田道今昔

三浦郡誌に「野比大作より西北方山間に入り、久里浜村岩戸に出で、衣笠村を経て横須賀市に至る里道を粟田道と称し、最も枢要なり。」とあり、利用度の高い近道であった。現在の県道野比森崎線が、おおむね昔の道に当たる。

昔、野比から巾2米足らずの道が、うねうねと北へ向って通じていた。島田バス停附近で左手の野比川が丘にかくれ、右手は雑木の生い茂った小高い丘で、その奥に池があり土地の人は「半の田の池」（約千坪）と呼んでいた。これは大作、下、中村の田畑の灌漑用水であったが、昭和45年頃ハイランドの宅造と共に埋められ、学校用地に予定されていたが埋立地で地盤軟弱なため現在地（粟田小学校）と交換された。今はハイランドへの登り坂となっている。

更に進むと、道に沿って水田が続く、（粟田側）右手のハイランド側にも水田を見ることができた。土地の人は「あわだ道」或は「あだ道」と訛ってよんでいた。この農道は遠く三浦の毘沙門・松輪あたりから、漁師や農家の人々が早朝から一日がかりで、漁師は下浦でとれた魚をザルに入れ天秤で担ぎ、農家の人はキャベツ・大根などの野菜を籠に背負い、また肥料（当時は人糞）をとりに牛車・馬車・リヤカーなどで佐原・大津・横須賀（佐野方面を指す）方面へと出かける往来であった。きつね・むじな・いたち或は時に追いはぎなども出没した寂しい道であったという。

更に粟田バス停より少し北へ向った右側に地蔵尊があった。200年前頃からのものと言われている。今は下りの島田のバス停附近石垣の上に移されている。「この地蔵尊は粟田の地蔵様と申し、粟田街道を旅する人々の安全や歯痛・頭痛その他の諸願に靈験ありと敬れ、諸願成就の御礼に貝殻を捧げる習しがある。昭和46年粟田の土地開発で田中家当主が此処に御移祀申し上げた次第」と碑に書かれている。

この地蔵尊のあった右手はハイランド、左手はわが町粟田、共に海拔100米前後の小高い丘の起伏は広葉樹林におおわれ、粟田側のそのはざまには水田が奥まで連なっていた。

当時は現在の焼木坂バス停近くのハイランドへの登道は無く、やがて道は焼木坂を下り始める。右手に庚申塔があり、そこから山へ入る道は峠を越えて久村から久里浜へと通じていた旧道である。

坂を下ったところが岩戸、新編相模風土記に「岩戸村（以波止牟良）江戸ヨリ十八里、四方山岳連リテ岩壁モテ門戸ヲ立テルニ似タリ、故ニ村名起ルト云。戸数十二」。

また三浦古尋録には「此村ハ山谷ノ処ニシテ白雲常ニ帯、樹々路ヲ爽テ伐木ノコダマニ響キ、松風流水ノミ聞キテ物静ナル山家也」とある。左に流れる岩戸川を渡った奥、満願寺のある谷間には、大昔から明治時代の末頃までは十二軒の部落であった。岩戸から道巾もやゝ拡がり、岩戸

川に沿って道は佐原方面に通じていた。粟田道に沿って残っていた早稲田、焼木坂、妙ヶ谷、山田、島田などの地名や小字からも、このあたりの往時のようすを伺い知ることが出来よう。また、わが町粟田は青垣山めぐる自然環境に恵まれ、四季のうつり変りをそのまゝに、我々に心の安らぎを与えてくれている。そして今もなおこのあたりには、次のような野生の動植物が見られる。

(鳥類) すずめ、からす、とび、つばめ、あかもず、ひよどり、つぐみ、うぐいす、ほおじろ、きじばと、めじろ、しろはら、あかはら、こじゅけい、じょうびたき、こがわらひわ、いかる、しめ、えなが、しじゅうから、せきれい、ひばり、あおじ、ごいさぎ、ふくろう、ほととぎすなど

(小動物) いたち、うさぎ、むじな、へびなど

(植物) くさぎ、うつぎ、はりぎり、まてばしい、やぶにつけい、きぶし、さかき、とべら、あおき、いばな、はぜやまざくら、おおしまざくら、たらのき、やぶこうじ、やまもみじなど

(山本記)

## 周 辺 の 史 蹟

粟田周辺の史蹟を、佐原方面から岩戸、粟田、野比方面へと訪ねてみよう。先ず佐原の県道右手に、

○御霊神社 高い石段は江戸時代のもの。御霊神社には祖先の霊を祭ったものと鎌倉権五郎景政を祭ったものと二種類あるが、佐原の場合は後者で佐原十郎義連が祭ったものと言われているが、記録がないので定かでない。

御霊神社と並んで山の中腹に、

○常勝寺 金谷山大明寺の末寺、日蓮宗、宝泉山常勝寺と号す。中興は常勝寺坊日珠、開山は大明寺三世日印聖人。文応年中の草創、本尊は三宝祖師、鐘楼、古鏡等元禄年中に地震のため破壊、明治19年1月18日当山37代日照上人のとき、本堂脇より出火堂宇を全焼。現在の本堂はその後久村丸山の経塚山千手院の本堂をそのまゝ移したものだ。三浦半島32か寺の日蓮宗の寺の中で5つに数えられた寺であった。

常勝寺から県道へもどり橋を渡って100米ほど奥へ進むと、

○正覚寺 金谷山大明寺の末寺、日蓮宗、小谷山正覚寺と号す。文安3年常勝寺坊日珠の創建、また元禄16年丹積日法が再興したと伝えられている。常勝寺の住職が兼務する隠居寺で壇家が少ないとのこと。日蓮宗の熱烈な信者加藤清正公が祭られている。須弥壇は江戸時代宝永年間

(1704～1710)のもの。

県道へ戻って更に岩戸へ進む。岩戸川を渡って岩戸の旧部落へ入ろうとする右手崖上に、

○**巴御前の墓** 三浦付近産出の砂岩で饅頭型のを重ねたもので、かなり崩れている。近江の国粟津の義仲が最後を遂げるまで行動を共にした巴御前。その後については異説があって明らかでない。和田義盛の側室になった話はあるが、佐原十郎義連とどう結びつけるか推測を拓げるのみである。

旧岩戸を奥へ進むと右側に、

○**熊野神社** 熊野信仰がこんな山里にと思われるが、海進が進んでいた頃の岩戸を考えるとわずける気もする。現社殿は内川の水神宮の旧社殿であるとか。

更に奥へ進むと右手に、

○**満願寺** 佐原十郎義連の発願により建てられた寺。大矢部の福昌寺の末寺の臨濟禅寺、かつては七堂伽藍の整った大寺であったという。入口の丸柱には三浦十八番岩戸観音の標識がある。寺は火災に逢い、今の本堂及び庫裡は戦後のもの。裏の観音堂に残された観音菩薩は佐原十郎義連の等身の仏とか。平家討伐に西に向う義連が戦勝祈願で発願し、戦勝と武勲の祈願が満されたため満願寺と寺号をつけたとか。

観音菩薩と地藏菩薩は国指定の文化財となり、他の2体、不動明王と毘沙門天は市指定の文化財となり、収蔵庫(庫裡の右手)に収められている。三浦氏の興亡の間にあって、不思議にもこの文化財が保護されてきたことは、境内に残る礎石の大きさと共に地域の信仰心に支えられたものか。信徒は現在三戸とか。

観音堂の登り口右側に“まずたのむ椎の木もあり夏木立”の句碑は、幕末の浦賀奉行与力中島三郎助の書で芭蕉の句。土地の名主山崎氏及び一族のものとは俳句の仲間がおり、文化面で武士と農民が一体であった証拠と言えよう。

堂のわきにある五輪塔は佐原十郎義連の墓と伝えられている。新編相模国風土記稿に「佐原十郎義連墓、観音堂の側にあり、五輪塔なり、高さ7尺、左右に五輪塔六基相並ぶ。」とある。周囲の瓦塀は寛政年間、三浦志摩守等の修築によるも、長い間の無住時代や廃寺化したことなどあって荒廃が甚しい。

焼木坂を登りつく手前左側に、

○**道祖神** 庚申塔と共に八基、もと栗田道脇にあったものを県道改修の折こゝに合設した。庚申しんは干支の庚申えとに当る日かのえさるを重んじ、身をつつしんでこの日を過す信仰。中国の道教には60年或は60日ごとに巡ってくる庚申さんしの夜には三戸の虫が睡眠中の人体から抜け出て昇天するという信仰があった。この虫が天帝にその人の罪過を報告すると、人は命を奪われるから、この夜は眠らずに善を行い身をつつしまねばならないとした。日本の庚申講、庚申待、三十三夜講などその行事である。

庚申を「かのえさる」と呼ぶことからサルサルの信仰とも結びつき、さらにサルタヒコ天孫降臨の道案内をつとめた神との連想から、道を守る道祖神とも習合している。また土地によっては神体を青面金剛農神としたり、農神としたり、庚申講と云いながら村寄合いやや経済的な講となっているところもある。

粟田の県道を更に南へ下る。十字路の手前左奥に、

○称名寺 醉蓮山称名寺、三浦三十三観音十一番札所、昭和45年46年と二度の火災に遇い、現在はコンクリート建築。本堂左手の観音堂は明治時代の建立、幸い焼失をまぬがれた。いわゆる「腹籠り観音」が安置され、古くから安産のご利益があらたかと伝えられている。

古くは真言宗大塔院と称し、観音堂と共に千駄ヶ崎にあったと伝えられ、貞永年間（1232～1233）に時の僧了法が親鸞に帰依して浄土真宗（西本願寺派）に改宗し、寺号も称名寺と改められた。それから200年後の嘉吉年間（1441～43）に大嵐と火災によって壊滅したので現在地に移したと言われる。その火災により観音堂の灰の中から観音像の首だけが残って出たので、その首を新作の観音像のお腹の中に納めたと言われ、右手がお腹にあてがわれている。即ち「腹籠り観音」或は「灰中出現の霊像」と言われる所以である。

称名寺の高い石段の前の道を少し奥へ進んだところに、

○最蔵寺 光照山最蔵寺、浄土真宗、開基開山は最善坊徳林上人。貞応元年（1222）の草創で、当時は最善坊と称し天台宗の寺で野比地区最古の寺院であった。正応元年（1288）浄土真宗に改宗。伝えによると徳林上人は元、禁裏北面の武士だったと言われている。本尊の阿弥陀如来は江戸時代の作で、他に恵信僧都作と伝えられる鎌倉時代の阿弥陀如来も安置されている。

最蔵寺から更に先へ進んだ左手奥に、

○最宝寺 五明山最宝寺、浄土真宗。寺伝によれば、建久六年（1195）に源頼朝が鎌倉の弁が谷に一寺を創建し、翌七年に宮中の高御蔵に安置してあった行基作と伝える薬師如来の坐像を頂戴して本尊とした。それ故寺名にも特に高御蔵を付けたのだとのことで、頼朝は自分の従兄に当る明光上人をこの寺の第一世の住持とした。明光は後に親鸞上人に帰依し、浄土真宗に改めた。九世明心法師の時、北条氏の真宗弾圧が始まったので、鎌倉から野比の兼帯所に移って来たと言われている。その本尊として祀られたという薬師如来の像は、今では別に祀られ阿弥陀如来像が本尊となっている。この薬師如来の像は昭和41年、県の重要文化財に指定された。

野比駅前から134号線に出る。長沢方面へ向う途中野比橋を渡った頃から左に東京湾が開け、砂浜が細長く続きやがて道路の左側に大きな碑が見えてくる。

○若山牧水夫妻の歌碑 この地の観光協会が昭和28年の文化の日に建てたもの。

海に面して

しらとりはかなしからずやそらの青海の青にもそまずただよふ

裏の道路に面しては喜志子夫人の歌

うちけぶり鋸山も浮び来と今日のみちしほふくらみ寄する

大正4年3月に病後の夫人の静養のため、家族三人で長沢の借家に移り住んだ。1年9か月の帯在だったという。その跡は何も残っていない。

栗田周辺の史蹟は拡げればまだまだあるが、こゝでは栗田道に沿って、極く限られた範囲に止めることにした。

(山本記)



## その他の社会活動

### ○粟田学区体育振興会（体振）

地域社会の体育の振興を図ることを目的として、市の小学校学区単位に組織され、市から委嘱された体育指導員が主体となって活動し、特に青少年の心身の健康づくり、明るい家庭と社会づくりに努力している。

粟田学区体振は、粟田、ハイランド2、3丁目で組織され、粟田学区住民の健康増進とスポーツの普及を計り、合わせて相互の親睦を深めることを目的としている。

（活動行事）

球 技 大 会（ソフトボール、ポートボール、卓球、バドミントン、バレーボール、ゲートボール、サッカー、ドッチボール）

水 泳 大 会

ソフトボール大会

健 民 運 動 会

バドミントン大会

卓 球 大 会

ゴ ル フ 大 会

（副会長 梶 原 泉）

### ○粟田学区公民館

横須賀市教育委員会社会教育課の主管のもとに、公立の公民館とは別に、小学校区の範囲で地域住民の教養や健康や情操の向上・増進に寄与することを目的に活動しています。毎年町内会の役員並びに各部部长が運営委員となり、講演会、講習会、見学会、歴史散歩、競技会、映画会等の行事を行なっています。

（運営委員長 山 本 正 治）

### ○民 生 委 員（児童委員）

厚生大臣の委嘱を受けて、担当地域の身体障害者、老人、母子、父子、児童問題の相談や、各種福祉関係機関との連絡及び資金の借入れ希望者に対する助言等、また、無職証明や保育所入所時の証明等も行なっています。

（ 1 丁目担当 田 口 登 志 子 粟田1-38-7 48-2866 ）  
（ 2 丁目担当 近 藤 美 年 子 粟田2-23-10 48-2869 ）

○老人相談員

県知事委嘱の民間ボランティアで、地域の老人福祉に関する種々の相談指導活動を行なっています。

(老人相談員 山本 正治 栗田1-9-6 48-1347)

○水曜日会

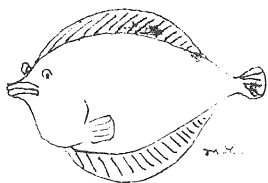
昭和52年9月に発足、毎月第3水曜日(9:30～12:00)に野比の横須賀第一・第二老人ホームで奉仕活動を行っているボランティアグループです。作業内容は話し相手、シート交換、室内掃除、行事の際の手伝い等です。この会にはいつでも参加できます。

(代表者 小室 乃芙 栗田1-41-2 48-5376)





## この地に移り住んだころ



1 - 25 - 10 加 藤 正 元

私が、当時住んでいた横浜駅西口近くの横浜市神奈川区の公務員宿舎からこの地に移り住んで来たのは昭和44年11月9日(日)であった。居は真新しくまあまあであったが住環境の方はお世辞にも良好とは言えなかった。例示すれば、

1. 家が少なく街が暗かった。
1. 野犬が多く町中を咆哮散歩していた。
1. 横浜方面への通勤は北久里浜・岩戸間の折り返しバスに頼るしかなく、岩戸バス停野比駅間は未舗装で歩いて行くには時間がかかり特に雨の日には道はドロコとなり短靴では歩けないほど、タクシーを利用しようとしても車体が汚れ町中を運転するのに困るとの理由で乗車を拒否される。
1. 第三工区は建設中で山肌が削られブルドーザーが土煙りを上げながらごう音を立てて走り廻っていた。
1. 現在のハイランド方面及び栗田小学校の辺りは未造成で緑濃い山であった(栗田小開校は昭和48年4月1日)。

その頃の或る寒い日の早朝1番電車に乗って三崎通り矢方面に磯釣りに行くべく家を出た。空は暗く2, 3星がまたたき寒い日であった。平素はごう音を立てて走り廻っているブルドーザーの動きもなく勿論人車の通りもなく怪しいくらい静かな淋しい朝であった。丁度造成中の団地入口附近(中村興業の現場事務所のあった辺り)まで来かけた時右手造成中の空地の中に一軒の家がポツカリと浮び上り、電灯の光の中に私同様釣仕度をした男の人が妻君らしい人の見送りを受けて家を出ようとしているのが目に入った。その時はホホウ俺と同じに釣りの好きな人も居るんだな!! ぐらいの軽い気持で通り過ぎ島田の辺りまで来た時に、待てよ今見た辺りは造成中で家など何もないところではないか、と気付きそれまでに再三再四土地の古老からこの辺りは深い山で細い栗田径が通っており狐や狸又はムジナがよく人を化かしたもんだ、等と聞いたことを思い出し急にゾッと悪感が背筋を走った。

当時淋しかったこの附近も今では1,300世帯の大団地に発展し往時の面影は何も残っていない。時々そんなことを思い出している今日このごろである。

## わが町と町内会の歩み

2-39-3 倉持辰治

わが町は東にハイランドの山を望み、南に野比に通ずる道ありて今は2車線なれど未来は4車線になるとか、夏の三浦の海への幹線道路になるのではないだろうか。西に山を背負い、北は岩戸から森崎、大矢部方面への切通しの切り立った岩山が北風を防いでいて、なだらかな傾斜地に住居が建並び、静かなユートピアを夢見て日々を過している。此の粟田町も古老の話によると、狭い農道の畑地で狐や狸がよく出没していた淋しい田舎道であったとの事、今は1,200軒位の家が建並び、その昔の面影は何処にも見ることができない程良い住宅地と変った。野比へ通ずる道路は四季を通じて自動車は激しく往来し、夏は特に三浦の海へ行く早道となり、自動車の渋滞は毎日の有様である。

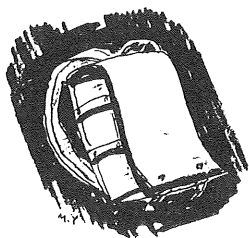
此の地を開拓造成した第百土地会社の第一期工事が出来上った頃は四十数軒程度の家、バスは久里浜より岩戸迄しか無く、折返してサヨナラをして行ってしまふ。天気の良い日はいいが、雨が一度降ったなら大変だ。濡れながら泥濘る道をやっと家に着いてホッとする有様であったとの事。其の后有志の方々がこれでは困りものだと相談しあい町内会の発足を見たとの事。初代より現在の会長成田金治郎氏を中心に、各役員が忙がしい身体の中を交渉に奔走された結果道路も段々良くなり、バスも岩戸より粟田迄延長され、多少は住み良い姿になって来たが、何としても野比駅迄バスを延してもらわねば困ると、陳情を重ねた結果現在のバス路線が出来上った。発着台数は少なく、家は二期工事も終り、家も増え勤人の一番重大な足をもっと確保するのに交渉を重ねて台数も増え足の確保が出来ようになった。商店もスーパーも出来、郵便局や信用金庫も出来て日常の生活には事かかなくなった。

町内会も発展し、種々の行事が行われている。成人の日には、これからの人生に大きく羽ばたく若者に町内会館に集ってもらい、一杯呑みながらこのあわたの町が、故郷となる若い人の力で、未来の住み良い町作りにと考えて、3年間行いましたが、残念ながら4、5人位しか集まらず、折角の計画も無駄との結論になりつゝあります。何卒若き人々も共に力を合わせて「わが町あわた」を発展させて下さい。老人の日は、70才以上の方を招待し、楽しく人生を長生きしてもらう様に元気づけ、意義ある一日を過してもらっている。中学卒業者にはボールペンを贈って祝福し、夏ともなれば暑い一日の労苦を忘れてもらう様に納涼大会を開催し、神輿や山車も出て、子供達共々楽しみながら三日間の行事が行われ、また町内の人々の融和と親睦を深める為にリクリエーション旅行を行い、日頃あまり顔を合わせぬ人々と語り合い唄い合って、一日ゆっくり楽しみ親交を温める良い機会である。文化の日は住民の絵画や書、写真、工芸、手芸、盆栽などを飾り、茶の湯のお手前を一服させて戴き、和やかな気分になり、婦人部の方々の美味しいおでん

に舌鼓をうち、美味しさに毎年早々に売切れてしまうという。此の様に種々の行事が和やかに盛大に行われると言う事は、段々と町の人々の顔もおぼえて、親しくなって行く良い傾向だと思う。其の他子供会の活動や婦人部員のお母さん方の献身的な協力、体育振興会の活力養成運動、学区公民館行事の歴史探訪、子供達への映画上映等。又趣味の交流、老人のゲートボール。町内会を中心としてこれからも益々発展して行くのも町会役員だけでなく、町内の一人一人がお互に手を携え、親しく声をかけ合って、楽しい町作りをして行こう。

長い間あわたの町作りにお骨折り下さった役員の方々に、心よりお礼を申し上げますと同時に、今後共にお互に努力して良き「わが町あわた」の住み良いユートピアを築こうではありませんか。「わが町あわた」に幸いあれ。

## 麻 ひ も



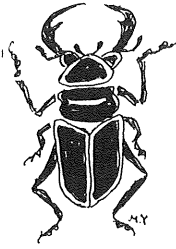
1-38-7 田 口 登 志 子

十四年前、長女が小学校一年生の時に私共は、こゝ粟田に移って来ました。当時の住所名は野比妙ヶ谷と言ひ、「仙人が住む所みたいね。」などと話した頃のことです。まだ野比行きバスはなく、北下浦小学校へ通う娘は、久里浜までバスで行き、京浜急行に乗り長沢駅下車と言う通学路でした。そのバスも今の様に回数がなく、従って毎度混雑し、小学生は背が低いので、さぞ下の方で足をふんばっていたことでしょう。ランドセルに定期入れをぶらさげて置くのですが、そのひもが、すぐにすり切れてしまったことから想像してもわかりました。そして、しまいには主人が麻をなつて、頑丈なひもで付けてやったこと等、笑い話の様な今日此の頃です。

“六年を子の背負いたるランドセル 捨て惜しみつつ八歳過ぎたり”

## あ わ た 雑 記

1 - 35 - 2 坂 本 繁 夫



### 紅 葉

ことしの気象は記録づくめであった。冬はきびしい寒さと十数回ともいわれた降雪があったり、冷夏という予想に反して猛暑となった長い夏、そして来るはずの台風は一つも上陸せず、秋霖もなかった。雨の少なかつた秋も深まって、さいきは冬の渇水期を控えて水不足が心配されている。

去年は秋口の台風が呼びこんだ潮風が木々の青葉を傷めつけ、茶色になった葉は早々に散ってしまった。それにひきかえ、ことしは見事に紅葉して街行く人の眼を和ませてくれた。

このあたりの紅葉は常緑樹との色彩の対比が基本になっての美しさのようで、内陸山地の広葉樹林にみられる、全山が燃えさかる炎のような紅葉とは趣の異なるものである。

栗田をとりまく雑木林には秋を彩る木としてどのようなものがあるだろうか。

紅く色づくのは大抵ウルシ科の木で、ハゼノキが多く、よく目立つ。黄色になるものには種々あって枚挙にいとまがないが、ひとくちに黄といっても濃淡さまさまあって弁じがたい。コナラをはじめとしてエノキ、ケヤキなどは黄色系に入れていだろう。また林縁には木々に絡みつく蔓草があり、これら草木類の黄ばみも色どりに賑わいを添える。これにはヤマノイモ、クズ、トコロなどがあげられる。おしむらくはイチョウ、カエデ、ブナのような量感に富む木を欠くために山里のような絢らんなる紅葉は望むべくもない。

紅葉の美しくなる条件として、秋も深まりを感じさせるころの、日中と夜間の気温較差が大きいくほどよいといわれる。ことしはこれを裏付けるように、秋になってからの雨が少なく、すなわち日照に恵まれ、日中の気温が上昇し、夜間は放射冷却の理で気温が低かった。それに加えて強い風や潮風に曝されないことが重要な要素のようだ。このあたりは誰もが知っているように風の強い土地柄であり、そのうえ海が近く、ちょっと湿った風が吹くと木に塩分が付着して、紅葉するような葉質の薄いものは傷みやすく、すぐ枯れてしまう。ことしはこういった試練にも耐えて、というよりは、そのような風にもあてられなかったので、植物たちにとってはこのうえなく僥倖の年だったようである。

### 少なくなったクワガタムシ

クワガタムシやカブトムシは昔も今もかわらずに子供たちに人気のある昆虫であり、大人たちにとっては懐旧をよびおこす存在でもある。

そのクワガタやカブトムシが栗田近傍から姿を消しつつある。なにもこれらの虫たちだけが少

なくなったわけではなく、昆虫など小動物全般にいえることなのであるが、だれでも知っている生き物として、かれらをとりあげてみよう。いまから何年かのち、私の書きのこしたことが単なる杞憂であったことを祈るものである。

クワガタムシとカブトムシは互いに近縁の大形甲虫である。暑い夏の日、甘酸っぱい醜臭を緑蔭に漂わすクヌギやコナラの樹液を探すと、大腮<sup>サイ</sup>をもちあげた雄々しい姿をみることがある。

成虫期に樹液に集まって、それを舐める習性は両者たがいに似ているが、幼虫期の生態はまるで違う。クワガタはやや湿り気のある日蔭の朽木内で生長し、その材部を数年がかりで食べ進む。カブトムシは落葉などの堆積した、いわゆる腐植質を好み、それを食べる。クワガタの幼虫期はたいへんに長く、種によっては3年ないし4年を要する。コクワガタやノコギリクワガタは2年ないし3年といわれている。これに対し、カブトムシの方はたった1年で成虫となる。

長沢、岩戸、久村などを含む近辺にはコクワガタを筆頭にノコギリクワガタ、ミヤマクワガタの3種が生息している。このほかに、私は1972年にヒラタクワガタを1頭採ったことがあるが、これは全国的にも少ない種で、その後の調査でも未発見であるから、このあたりではもうすでに姿を消したものと考えている。

ノコギリとミヤマは数は少ないものの、同じくらいの個体数が得られる。奇妙なことに、ノコギリは長沢地域に、ミヤマは岩戸の佐原寄りと久村近辺にといった具合に偏って分布しているらしいことが野帳を整理して気がついた。

こう書いてくると、なんだかこれらの虫たちがそれほど少なくなってきたような書き方ではなくなりましたが、実際は採ろうと思ってでかけて行っても採れるものではなく、偶然に灯火に飛来したものとか、林の近くを歩いていて地面にころがっているのを拾ったとかいった程度の少なさになってきているのである。

かれらがこれほどまでに減ってしまった原因については、いろいろな考えもあろうかと思うけれども、自然の営みは人智を超える奥深さを秘めているものであるから、軽々に論じらるべきものではない。しかし、この十数年の間、近隣の山野を跋渉して得た知識をもとに、平素ひそかに考えていることを書き残しておこうと思う。

私が自然観察の途次よく通る場所として、自分で勝手に名づけている栗田農園（緑会の耕作地？）を少し西に行くと下り坂になり、長沢の地内に入り、井上という集落に出る。その近くの畑のへりや林縁にはかつて疎らにはあるがコナラやクヌギの木があり、時季には樹液がしみ出して、かならずといってよいほどにクワガタがみられた。それらの木々がどう理由でからか、ある日突然に根元から伐り倒されてしまった。虫たちにとっては大切な栄養食物源を一朝にして失ってしまった。久村付近でも同様のことがより大規模に行われ、近隣の昆虫たちに大恐慌をもたらしてしまったようなのだ。いまや観察者にとっても、かれらが集まってきていた木がなくなったために、観察の拠点を奪われ、いっそうその消息がつかみにくくなってしまったので

ある。

私は、かれらのその後の動静を探るため、夜間観察を続けている。公園や道路沿いにある水銀灯を巡回し、それに飛来するであろうかれらの個体数の推移を見ようと考えたのである。もちろん四六時中みているわけにはいかないから、きわめて大ざっぱなもので、去年よりは今年の方が多いか、少ないかといった程度の見きわめができればいいのだ。初夏から九月いっぱいの間、つぎのコースを自転車で一巡り2時間ぐらいで見て回った。

粟田歩道橋—野比十字路—消防署前—踏切—信号左折—信号右折—野比中前—久里浜療養所—海岸沿い 野比橋というコースである。この観察結果によると、野比方面での個体数は昔と大差がないが、島田（大作）バス停あたりから粟田、岩戸にかけて顕著に個体数が減少し、特に5年ほど前から衰退が著しい。

真の原因は何であれ、私たちの周囲から小さい生命たちが、暁天の星のように少しずつ消えていくのを見ているのはしのびがたい。何かいまのうちにかれらを救う手だてはないのだろうか。私にできることは、かれらがここに生息していたことを書き残して、存在証明書を発行するぐらいのものだろうか。

幼虫が食べて育つ朽木のいいのがなくなってきたためか？ 樹液の出る木がなくなったためか？ 樹液ならスダジイやタブでも出るのだから、選り好みさえしなければなんとか生きのびられるのではないか？……などと定まらない自問自答を繰り返している。

#### ウラジロ

ウラジロとはお正月に門や床間飾りなどに用いるシダ（羊歯）の一種である。裏白という字が当てられる。これは葉の裏側が白いことに由来し、腹が白い、すなわち何の腹蔵のないことを表わして、縁起ものに使われるのだという。

このシダとの出会いは粟田に住みはじめて二、三年後のことで、近くの雑木林を徘徊しているうちに偶然に見つけたものである。もちろん私にとって初めて見る植物だった。

鬱蒼とスダジイなどの茂る林内の、やや乾燥した陰地に、優に背丈を越す大きなシダをみたとき、これはヘゴというものではないか？と思ったが、そうでないことはすぐわかった。ヘゴは木にまがうシダ植物だからだ。

それまで、私はこんなに背丈の高いシダをみたことがなかったので、大いに感激したのであった。丈は2メートルを超える。他の自生地を知らないので、はっきりとはいえないが、樹陰地にヒョロヒョロと背だけが伸びたような感じで、葉の数も疎らで、なんとなく所を得ないという風情であった。

裏面の蒼白な洋紙質の葉、エナメルを塗ったような強靱な茎、頂端がぐっと立ちあがる提琴の穂先のようなフィドルヘッドは、初めて見るものにこの植物の特徴を強く印象づけるものがある。

ウラジロの分布は関東以南の暖地山中といわれている。三浦半島での分布はどうなっているのか、識者にたずねることもなくそのままになっているが、いまだに私は他のどこでもみたことがない。

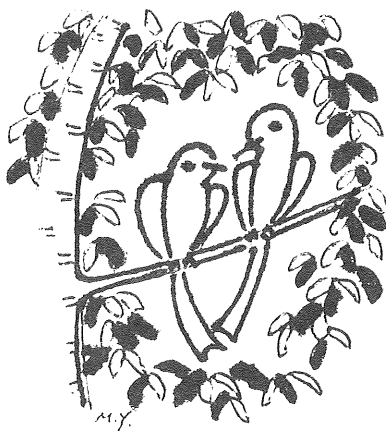
私がこのシダをみつけてから12年の歳月を経ている。この一文をしたためている日、ふと、このシダの安否が気になり、たしかめに行った。往復30分もあれば十分だから何の造作もないことだった。けれども結果はがっかりするものだった。

もともと3株ぐらいが疎生している状態だったが、往時のたたずまいはなく、わずかに生き残った地下茎からの分芽が、小さな葉を2枚つけただけのわびしい姿で初冬の風にふるえているのだった。林内がさっぱりしすぎる、下草もろとも刈り取られたのか、もう林そのものが荒廃して生育できなくなったのか？ どうも後者のようなのだった。来年またたしかめにこようと思う。

シダの話題のついでに書き加えるが、粟田にはジュウモンジシダという比較的珍しいシダが自生している。これは内陸山地に多い植物である。三浦半島では二子山でしか出会ったことがない。

特徴は十文字羊歯の名のように、一枚の正中葉（主葉）の基部から左右に二枚の副葉が派生して、その形が恰も十字をなすことである。拙宅には粟田産のこのシダを植えてありますので、ご興味のある方は声をかけて下さい。

（昭和59年11月29日稿）



## 粟田のむかし

2-37-13 仲野正美

粟田に昔のものが残っていると言うと、意外にと思われる方も多いのではないのでしょうか。昭和42、3年ごろから開かれた新興団地に文化財など残るはずがないと思われるのも当然でしょう。しかし、この周辺にはいくつかの文化財が人目にもふれず残っているのです。

まず、かろうと古墳です。場所は団地南方の山頂、粟田小と道を挟んだ反対の山です。かろうとは墓の遺骨を納める石室をさしますが、この古墳には盛土がなく、石室が当初から、むき出しになったまま発見されたところから、名付けられたと考えられます。

みなさんは古墳というと、あの仁徳陵（このごろ大山古墳とも呼ぶ）など濠に囲まれた天皇陵などを思い出されるでしょう。しかし、そんな大きな古墳ではありません。でも、山頂に石室を持ち、山（標高95m）全体を墳丘とみれば、どうして、りっぱな古墳でしょう。

さて、この古墳に埋葬された人はどんな人だったのでしょうか。

まず、神奈川県内の古墳のようすを調べてみましょう。古墳の密集地は大きく3つに分けられます。それは相模川流域、多摩川流域と三浦半島です。弥生時代に始まった米作が盛んになると、川の流域が耕地として多く利用されることから、両河川の流域に古墳が集まることが想像できます。しかし、耕地の少ない三浦半島、久里浜周辺にかろうと山古墳を含め、4基もあったのはなぜでしょう。

それは農耕以外、たとえば水上交通（古東海道は三浦半島から海路で千葉へ）を握っていた豪族であったろうといわれています。この古墳の上に立つと、木の間から海を隔てて房総の山々を眺めることができます。

また、団地の北端に焼木坂があり、この粟田と岩戸の境の道端に庚申塔が10基程ならんでいるのにお気づきでしょうか。

さて、この庚申信仰は、もともと中国から伝えられたもので、人の体の中にいる三尺の虫が庚申（かのえさる）の日に、天帝にその人の悪事を伝え、寿命を縮めるといわれ、人々はその虫が体内から出る日に徹夜して、防いだのが始まりと言われていています。平安時代貴族がやったという記録がありますが、江戸時代庶民に広まり、各村々で盛んに行われたようです。また、何年かごとに講中（講の仲間）が協力して造塔したのが、この庚申塔です。村々の境などによく数基並んでいるのを見ることがあります。この庚申塔、専門家の先生のお話ですと、三浦半島は大変に数が多く、また、形態的にも変化に富んでいるそうです。これも周囲を海に囲まれ、各地からの文化が入った証拠だとも言えます。

このように、身のまわりの昔のものから、先人たちの考え方、暮らしぶりを想像することは、たのしいことではありませんか。



## 史跡をたずねて



2-28-8 岡 健 治

経済大国と各国から云われるようになった日本の国内では、いろいろと物資が豊富になり、なに一つとして不自由を感じない程になった反面、人と人とのつながり、心の温かさがだんだんうすれて来た感があります。子供も、大人も、老人もみんな一緒に楽しく暮らせる明るく幸せな、わが町粟田の将来を願っている粟田住民の一人です。三浦半島のほぼ東の中央部に位置するわが町粟田は、妙ヶ谷と共に昔から地名であったが、名所旧跡と称される風物史跡はありません。そこで隣の町に足をのばし、由緒書きの立札を見たり、土地の古老の話などを総合し、自分の足で歩ける近くの風物史を書くことにしました。

参詣やハイキングなどの折に、参考に出来ましたなら筆者の幸とするところであります。

### 念徳寺山と呼ばれる由来

現在の野比森崎線（粟田団地前の県道）の道路を岩戸に行く途中、右側に庚申供養塔が建っている。庚申塚の横を入ると久村に出られる市道ながら細い坂道があり、岩戸から登り坂になっていて登りきった頂上にも庚申塚があり、この頂上までを焼木坂とよばれた。この頂上から久村までの下り道を昔から久村坂とよばれている。今は焼失して、なき念徳寺の由来を若き世代に語り伝えるため、庚申塚の横に入った路上から見渡せる右の山並を念徳寺山と呼ぶようになったとの言い伝えがある。

### 念徳寺はなぜ焼失したか

昔念徳寺には、寺宝として金の斧があったと伝えられ、その金の斧を目当てに盗賊が寺に押入ったが斧が見あたらず、その腹いせに寺に火を放って逃げたという。また念徳寺跡の土中に金の斧が埋められている伝説も残されているが、その真偽の程はさだかではない。またその頃、三浦一族の武将達が野外の武道場として利用していたと言う場所が現在岩戸の採石場となる以前山合にあり、馬の鞍掛台や、ひげ抜き台などが残っていたと云う。

### 念徳寺のあった場所

焼木坂のほぼ中間あたり、道路の右側がいま畑になっているその右手の山の上に建っていたと云われている。今はその面影すら残っていない。周囲は大きくなった雑木と竹藪におおわれ大木の山ぐみの木が一本あり、その下側に墓石が一基建っていて時折り季節の草花が供えてあるのがいたく目をひく。この念徳寺は岩戸にある満願寺の末寺と言われ、禅誉上人が隠居していたと云われ、ちょうどその頃弓を持った浪人者が鳥を射歩いていた姿をよく見かけたという。ある日のこと、上人が本堂の前をいつものようにぶらぶら歩いていると、一羽の鴨が鳥の首をくわえて本堂の前にうづくまっているのが目にとまった。そばに寄ってよくよく見ると、鴨は雄鴨の首をく

わえていた。いかにもしょんぼりと悲しげの様子である。よく見かける浪人の所業に相違あるまいと、可愛想に思った上人は、よしよし仏果を授けて進ぜようと読経をしてやると、鴨は聴き入るようすにて、やがて経が終ると首を置いたまゝいづこともなくとび去ったと云う。その日の夕方、例の浪人が弓を手に念徳寺にやって来た。寺の者は早速浪人に、上人が鴨にしてあげたことを話して聞かせたところ、浪人は自分のした所業に深く恥じ、心を入れかえ上人の弟子になり、持っていた弓の弦をはづし、矢を切って二度とこのようなことをしないと契い、上弓坊と名乗って仏門の人となり、仏に仕えたと云われ、それ以来、念徳寺のあったあたりから焼木坂の頂上あたりの台地を、矢切りの峰とか矢切りの台などと呼ぶようになったと云う。

### 清 雲 寺

岩戸を経て佐原交差点を左折し、衣笠インター途中左側に小高い山があり、その山の頂上に清雲寺がある。正しくは大富山清雲寺と呼ぶ、この寺は三浦三代の墓所として多くの人に知られている。この寺は二代為継が開基した寺で、本尊は中国からの渡来仏で滝見観音像である。本堂の一段高い裏手に白壁囲いの廊になっていて、その中に凝灰岩製の五輪塔墓碑が三基仲良く並んで建っている。中央は二代為継、左は初代為通、右が三代義継の墓碑である。

### 腹切り松の由来

清雲寺の近くに、腹切り松公園がある。そこの公園内に記念樹の腹切り松があり、この松は昔の松が老枯により替えて植樹された松で、その松の木の下に三浦大介戦死之处、と刻字された記念碑が建っている。治承四年（1180）八月二十六日、源頼朝の源氏再興に味方した三浦一族が当時平氏に属していた武蔵の国の武将、江戸重長、河越重頼、畠山重忠らの率いる三千騎の大軍に攻めたてられ、翌二十七日衣笠城が落城し三浦一族が房総にのがれるという衣笠合戦の際、一族の長であった当時八十九才の大介は衣笠城と運命を共にしたことになるが、いい伝えによれば、落城の混乱にまぎれ運よくのがれ、祖先の霊が眠る円通寺が望まれるこの地の松の木の下で割腹自害を遂げたとの言い伝えが残されている。

### 佐 原 城 跡

この城跡は岩戸から、佐原交差点に行く途中の左側に常勝寺がある。その反対右側に最近ホテルの宿で知られる岩戸川が流れている。その橋を渡るとすぐ左手に南無妙法蓮華経と刻字した背丈けくらいの石が建っている。その道を登りきったところに広い台地があり、そこが城跡だと言う、野球場が出来る位の広さの台地で、いまはススキが茫々と生い茂っている。この佐原城は三浦古尋録によると、佐原十郎の居城と云われ、城跡から遠くは大楠山、衣笠山、森崎などが一望出来る高台であり、昔このあたりを防備する要塞地としての重要地点とされていたと伝えられて

いる。

### 三浦村名住来言葉

海原の浪も静けき相模灘，陰に三浦の浜つづき，千船百船真帆かけて，出入港の西東，浦賀の町数十ヶ町，谷戸宮下紺屋町，田中蛇島浜町や，荒井洲崎に新町も，大賀町へ引続く，芝生新巻高均吉井，久比里の磯を伝い来て，大塚小塚灯明堂，尾形浦より検校崎，川間分穂に五百代<sup>ひろ</sup>，さて下浦の道筋は，八幡久里浜や，浜の真砂路行先は，野比長沢に津久井浜，猪穴今井上宮田，城ヶ島山かがり堂，軒を列ねし家並の，城村過ぎて二町谷，諸磯網代三戸浜の，下宮田和田赤羽根の，向うは長井佐島浦，林大和田長坂も，芦名秋谷は下山口，森戸葉山や堀之内，三が村より小坪村，丘に見ゆるは久野谷なり，逗子桜山池子村，沼間山之根船越や，長浦田浦浦之江<sup>どう</sup>，逸見横須賀は戻り道，深田中里不入斗，佐野より浜手は久郷村，田津の砂道踏みしめて，山崎大津竹沢も，矢之津の坂を脇に見て，馬堀伊勢町走水，観音崎を腰越や，鴨居の里を山ごしに，浦賀の町を過ぎ行けば，久村佐原に岩戸村，衣笠山にて見おろせば，上武下武須軽谷，高円坊に程もなく，竹の下道帰り来て，大矢部小矢部森崎や，根津神金宗源寺，金谷池上阿部倉は，平作村の続きにて，木古場山口一式の，平松が根に休みなば，はや鎌倉も程近し，三浦の郷の村々を，凡そながら記しつつ，寺手の筆の道しるべと。あなかしこ。

これは吉井の齊藤清太郎氏宅にて発見されたものである。文久元年諸化，齊藤太郎吉と書いてあるだけで，筆者は不明であるとのことである。

## あ と が き

人間が環境を作り、環境が人間を作るという。わがまちあわたが生まれて15年。以前は谷間の僅かな水田と、雑木に覆われた起伏の多い丘であった。歴史のない所へ人が住みつき、15年の歴史を作って来た。尊い足跡と言えよう。

昭和45年1月に60余世帯から発足した町内会の歩みは、苦難の連続であった。しかし、そこには明るく住みよい町づくりのための、情熱と協力との結集があった。そして現在、1,200余の大世帯にまで発展した。

この冊子は、粟田の発展の過程を辿ると共に、今を生きる人々が、新たな町づくりへと躍進するよすがにもなればとの願いを込めて編集された。大方の参考に供することができれば、望外の喜びとするところである。

編集委員一同、不馴れな仕事にも拘らず、労を厭わず一応15年の歩みをまとめ得ることが出来たのは、多くの人々からの寄稿や資料の提供など、多大の協力を頂いたお蔭で、ここに厚く感謝し、お礼申し上げる次第である。

昭和60年1月 山 本

### (資料提供者)

真 壁 暉 人  
牧 野 進  
木 村 文 雄  
佐 川 孚  
加 藤 正 元  
山 本 正 治  
倉 持 辰 治  
田 口 登志子  
坂 本 繁 夫  
岡 健 治  
仲 野 正 美

(敬称略, 順不同)

### (編 集 委 員)

成 田 金 治 郎  
岡 健 治  
山 本 正 治  
加 藤 正 元  
八木沢 嘉 一  
木 村 文 雄  
佐 川 孚  
井 戸 敏 彦  
阿 部 日 出 男  
星 野 昭 二  
倉 持 辰 治  
篠 崎 幸 生  
逸 見 和 恵

ご協力ありがとうございました。

わがまち あわた 発足15周年記念誌

昭和60年1月 発行

編集・発行 粟田町内会

代表 成田金治郎

印刷所 ㈱ 雄広社(脇口 育雄)

横須賀市浦賀町3-71

TEL 42-1127(代表)

